
世界のだれかが紡いだもの

新巻鮭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界のだれかが紡いだもの

【Nコード】

N8793X

【作者名】

新巻鮭

【あらすじ】

アーセラナ・フォーマルティアと呼ばれる巨大建造物が空に浮かぶ世界。

強大な力を手に入れ、記憶を失った少年、エリオンは、荒廃した街中でナクアと名乗る少女に出会う。

2人は『全人類の消滅』を阻止するため、底知れぬ戦いへと、身を投じることとなったのだが……………。

一応、毎日17時に更新するつもりです。

登場人物とかアイテムとか現時点での設定資料集（前書き）

ネタバレやめて！ と言う人は先に本編読んだ方がいいかもです。

登場人物とかアイテムとか現時点での設定資料集

▼登場人物

エリオン・デイスデーター（レイト）

本作主人公

本名よりレイトと呼ばれる比率の方が高いかも。

死にかけていたところをフォルマルティアに拾われ、改造と洗脳を受ける。

しかし、記憶喪失で洗脳が解けてしまった。

ナクア

本作ヒロイン

洗脳を自力で破ったすごい人。

フォルマルティアで改造を受けたエリート。

エリオンよりもずっと長い間、フォルマルティアの軍勢と戦っていた。

シルフィー・ケルセリアス

本作……………役職不明女性キャラ

序章でヒロインかと思いきや、まさかのフェードアウト。

かと思いきや再登場したり。

筆者が一番扱いづらいなー、と思ってるキャラ。

エリアリーネ

本作サブキャラ

通称リア。

今後もそれなりに登場するかも……………？

副隊長

本作やられ役部隊副隊長

人類戦線の中で1番出番と言うか、地の文で活躍してる人。

参謀（隊長）

本作やられ役部隊隊長

何だか微妙な立ち位置の人、隊長なのに。

通信士

本作やられ役部隊通信士。

リーダーとにらめっこもしていて、1人で2つの役職をこなす頑張り屋さん。

▼アイテムとか

情報素子

様々な情報を交換するための機器のこと。

エリオンの国では腕時計状にまとめられたコンパクトなものが主流。

ディスプレイ

ホログラムのように宙に投影された画面のこと。

現実世界のディスプレイと役割は同じ。ただ、質量は無い。

退避機

緊急時などに使うテレポート装置のこと。

受信機のある場所まで対象となる物体を飛ばす。

機動装甲

人型ロボット。

物語開始時点で平均的な物は

- ・全長：9メートル

- ・質量：25トン

- ・出力：500メガワット

人類戦線の切り札ともいえるもの。

空間眼界のせいで航空機が発展できない世界だからこそ、であるう。

▼フォマルティア軍勢の職業

一般（ノーマル）

一般兵。

仮面を被っている。

武装は豊富だが、弱い。

エリート（エリート）

エリオンやナクアが所属するのがこれ。

破格の戦闘能力が与えられている。

変わり種（ミュータント）

この世界の生き物とは思えないほど巨大で凶暴な生命体。

並みの銃器では傷も負わず、人類なら機動装甲を着込まなければ鼻息の1つで吹っ飛ばされてしまう。

霊長類だけでなく、多種多様な生き物を模している。

▼支給品

Gr T ゲラート

支給品の中で基礎的な性質を持つ装備。

攻防一体の優れもの。

特殊な力場を生成し、目標を破壊する。

力場の範囲は任意で調節可能だが、距離が離れすぎると威力が落ちる。

デインス
D n S

機関銃デザインの機関砲。

威力、連射速度共に機動装甲が装備する37ミリ機関砲を余裕で上回っている。

使い方次第でミュータント1個師団でも軽く屠れる。

弾速は秒速1000メートル程度。

ゼスイ
Z s I

ランタン。攻撃用ではない。

明るく照らすだけでなく、周囲の毒素（臭い含む）を取り除く優れもの。

なぜランタンと組み合わせたかは不明。

フォルトウス
F r T s

まだ内緒。

この先のネタバレになるっす！

登場人物とかアイテムとか現時点での設定資料集（後書き）

これは物語が進むに合わせず、まったりと更新するつもりです。
本編より大らかな気持ちでお待ちください。

齒車を回す者

己^おれは……己^おれは——死にかけていた。

まだ死んではない。けれど死んだも同然だ。

——己^おれは傷を負っていた。

腹に、背中まで貫通するドデカい傷だ。

腰から下はそれこそ文字通り皮一枚で繋がっているだけだろう。

血は己^おれの身体を見限ったように、己^おれの身体から逃げ出すように、だくだくと流れだしてゆく。

まだ意識があるのが不思議でならない。まだ生きているのが不思議でならない。

己^おれは目を開けてみた。

とてもとても綺麗な曇った夜空だ。星一つはおるか、月の灯りすら見えやしない。

己^おれは首を横に捻ってみた。

背の低い草が飽きるほどたくさん並んでいた。

どちらも冥土の土産にするにはあまりに貧相でつまらない景色だ。

己^おれはもう一度目を閉じた。

こんな体についている目なんて、どの道必要ない。もう瞼を開くことは無いだろう。

かと思った矢先に、何かの気配が己れに近づいてきた。

空間を自分だけで埋め尽くさんと息巻く、強烈に巨大な存在だ。

仕方なく己れはもう一度目を開けることにした。

この存在、己れは知っていた。

知識としてだけ——知っていた。

——アーセラーナ・フォーマルティア——

己れも見るのは初めてだ。

長く、永く、解明され得なかった。そして今なお謎を多く残す、巨大建造物。

空に浮かぶもの、空を泳ぐもの、空を管理するもの。

諸説あるが、結局のところ、空に存在する意味不明な物体、としか認識されていない。

人それぞれにアーセラーナ・フォーマルティアに対する認識があるのだ。

あるものは空に浮かぶ方舟だ、と。

またあるものは空にそびえる城だ、と。

——己れは、空を泳ぐ、鋼の魚だ、と思った。

齒車を回す者（後書き）

勢いで作ってしまった……反省はしている。
完結させることは果たしてできるのか……。
期待せず待つよろし、ですよ。

銀色の季節（前書き）

投稿したことを後悔し始めている今日この頃。
滞っても、自然消滅しても、気になる人いないだろう。
とか思ってますが、がんばりますよ。それなりに。

銀色の季節

——人は空を飛べない。

知っているだろう？ 人に羽はないのだから。

空は、雲は、その向こうの星の世界は、まだ誰も立ち入ることのできない世界だ。

——唯一の例外を除いて——

己れはエリオン・デイスデーター。

両親が共働きのこの世界では割と普通に属する学生だろう。

「誕生日、おめでとうございます、エリオンさん」

そして、今日は己れの誕生日だった。

目の前の女の子に祝われるまで、己れ自身、きれいさっぱり忘れていた。

「やあやあ、ありがとう」

己れはそんな言葉に対し、照れを隠すようにおちやらけた返事を返す。

内心では飛び上るほどに嬉しいのだが、もう誕生日で喜ぶような歳じゃない。

今年己れは１７歳になった。

だから何ができるようになる、と言うワケでもないのだが、これでまた1つ更新した。

……………彼女いない歴の。

「ケーキ、切り分けますね」

テーブルの上に置かれた彼女の手作りケーキにナイフが入る。この場には2人しかいないのに、きれいに8等分してくれた。

「そんな細かく切り分けたって、しょうがないんじゃないか？」

己れは思わず素の意見を口から落っことしてしまっ。

そんな己れに、彼女は微笑みながらこう言った。

「2人で1度、全部食べきれないでしょう？」

それはそうだ。

「それに、おじさんやおばさんの分も残しておかないと、ですよ」

人差し指をピンと立て、虚空に円を描きながら、言う。

まるで悪いことをした子どもをたしなめるような口調で。

己れより2歳も——いや、今日で3歳差か——年下なのに、とても心配りができて、家事全般に長け、前途有望な容姿の持ち主。

それが、今己れの目の前にいる己れの従妹、シルフィー・ケルセリアスである。

両親が共働きで、なおかつ遅くまで帰って来ないものだから、という理由で毎日お弁当や晩ご飯を作ってくれている。

時には掃除や、洗濯までしてもらっている始末。

我ながら情けない限りだ、と、いつも思っのだが、結局今日に至ってもまだ直る気配はない。

「そう言えばさ、栄養バランスとかは考えないのか？ 今日のメニュー」

ケーキがメインディッシュなのは言うまでも無いが、その周りにはチョコレートやフルーツなど、糖分と脂質がが多分に含まれるものがひしめいている。

「今日はエリオンさんの誕生日ですから、特別です」

そう言っているが、己れは知っている。

彼女は、大の甘党なのだ。

「自分が食べただけだったりして」

彼女にとっては痛いところを突かれたのだろう。

一瞬表情をこわばらせるも、すぐに愛想笑いを浮かべてみせる。

「えへへ」

可愛らしく笑って見せる彼女の姿を見ると、なんだか何をやっても許してあげたくなってしまうな、と思ってしまうのは、身内のひいき目、と言うヤツだろうか。

それからしばらく、おやつのような夕食もあらかた片付いてしまった頃だった。

「なんだか、騒がしくありません？ 外」

そう、何があったかは分からないが、妙に外が騒がしい。

「見てきますね、エリオンさんは待っててください」

その瞬間からだろうか。

己れが、摩訶不思議な物語に巻き込まれたのは……………。

銀色の季節（後書き）

オレを『己れ』にしたのは間違いだったかも。
何だかエリオンさんのイメージに合わないよ……。

錆びついた盾

「んなワケにいくか」

彼女を制し、己れが窓から外を見る。

消防車や警察車が走り回っているのはさっきから音で分かっている。

問題は、何が起きている？

その答えは案外すぐに届いた。

《緊急事態が発生しました。住民の皆さんは、命令の通りに退避機を作動させてください》

どうも、広範囲に及ぶ『何か』が発生したことは間違いなさそう
だ。

その、『何か』が何なのかまでは、まだわからないが……。
とにかく、逃げるに越したことは無いらしい。

「避難命令だ……荷物をまとめよう」

この国では、危険度に応じて、3種類の警告が出される。

ひとつ、避難勧告。避難した方がいいかも、という、割と軽度な
もの。

ひとつ、避難警報。避難しなきゃ死ぬかも、という、割と重度な
もの。

ひとつ、避難命令。いいから逃げろ、逃げなきゃ殺すぞ、という、
問答無用なもの。

今のは『避難命令』だから、問答無用の緊急事態だ。

しばらく遅れて、情報素子——様々な情報を交換するための機器のこと。この国では腕時計状にまとめられたコンパクトなものが主流——が、ディスプレイ——ホログラムのように宙に投影された画面のこと、現実世界のディスプレイと役割は同じ——を展開。警報のメッセージをデカデカと表示する。

——！！すぐに最寄りの退避機を使用してください！！——

そんなことはわかっている。

己れは荷物をまとめるシルフィーを後目に、押し入れから退避機——テレポート装置のこと、受信機のある場所まで対象となる物体を飛ばす——を引っ張り出す。

コート状のそれは、とても厚く、重いほこりをかぶっていた。しかもこれは座標設定に時間のかかる旧式、いや、むしろ骨董品ともいえるほどだ。博物館に置いていても不思議じゃない。だが、こんなものでも今ある退避機はこの退避機だけだ。他は無い。

のたのたしていたら、ここも危険にさらされるかもしれない。己れたちは、ほこりを入念に払ってからそれを着込む。そして電源コードを接続し、さっそく起動する。

錆びついた盾（後書き）

ストーリーの大筋をまったく考えずに書いている野心作、3話目に突入しました。

今回は物事の解説が大半を占めましたね。

あんまり見てる人はいないだろうけど、やっぱりこういうのはこだわってしまうのですよ、私と言う人間は。

裁く世界と消えゆく命

……………遅い。

起動はした。だが、座標設定に時間がかかりすぎている。

かと言って、何が起こっているかも分からない状態だ。うかつに外に出るワケにもいかない。

つまり、他の退避機を探しには行けない。

ただ、間に合え、間に合えよ、と心の中で何度も、何度も祈り、念じるのみだ。

——家の玄関の方で爆音が響いた。

神様はどうも己れの願いを鼻息ひとつで吹っ飛ばしてくれたらしい。

爆発のあった玄関の方から人が侵入してくる音が聞こえる。

あいにくと、今の己れたちには誰が、何者が侵入してきたかを確かめている暇も手段も無い。

できれば、関わり合いになる前に、テレポートし終えてしまいたい。

足音が近づいてくる。

今、己れたちがいるのは、2階。

来るなら来るで、後回しにしてもらいたいが、どうやら、向こうにはお見通しらしい。

こちらに向け一直線だ。

轟音、ドアが吹き飛ばされる。

いよいよ侵入者さんご対面、となった。

「きひ、きひひひひひひい！」

気色悪い笑い声と共に入室してきたのは、ピエロを連想させる仮面を被った、狂人。

手には大型の銃器……………アレは確か、ハンド・レールキャノン携行型電磁波砲だ。

「ひゃあああはっはっはっはあああああ！」

電磁波砲の砲口が己れたちに、正確に言うにはシルフィーに、向けられる。

そこからはもう、とっさの判断だった。

己れは彼女をかばうように前に進み出た。

そして、次の瞬間に己れの腹は砲弾を飲み込んだ。

「あ……………」

砲弾は己れの腹を抜けた。背中まで貫通した。

おかげで声を発することもできない。

というか、腰から下がまだつながっているかどうかすら分からない。

だが、砲弾の威力は減衰したはず、つまり、彼女は守り切れたことだろう。

何だか奇妙な達成感がこみあげてくる。

そんな思考を続けられるのもつかの間だった。

あまりの痛みに脳が思考を放棄してしまったのだ。

感覚を放棄するまでもう少しかかる。それまで思考はお休みだ。

.....。

脳が痛みを捨て去るころを見計らったかのように、緊急転移装置が起動する。

これで、安全地帯までひとつとびだ。治療も受けられる。

己れの身体が光に包まれ、しばらくたら、周りの風景が変わり始めた。

——緑色の大地に、鈍色の空。

想像していた安全地帯とは似ても似つかない光景だ。

草がぼうぼうに生い茂り、地平線まで人の気配すらない。

さっきの砲弾のせいとしか考えられないが、何らかの理由で転移装置が壊れたのだろう。

もう1度使っても、戻れる保証はおろか、まず人が生きていける場所に出るかどうか自体が、危うい。

ああ、くそ.....。

ついて——ないなあ.....。

裁く世界と消えゆく命（後書き）

すさまじく不定期な更新で4話目です。

カービィWii買ったよー。でもしばらくは積みゲー。

齒車に巻き込まれる者（前書き）

第1話で書いたのをもう1度使う気にはなれなかったので、割愛した部分があります。

第1話を読み直していただければ、つながりますヨ。

齒車に巻き込まれる者

知ってるかい？

人間は神様無しじゃ生きられないんだよ。

無神論者だって、心の拠りどころは絶対にあるからね。
それこそがそいつにとっての神さ。

ほら、結局人間は神様の呪縛から逃れられやしないんだ。

死にかけていた己れは、ふと、目を覚ました。

……………己れって誰だ？ 俺、オレ……………僕？

じゃあ僕は誰？

ここは？ 何？ 何が起こって？ 何が？ 何だ？

渦巻くのは疑問にもならない疑問。いつになっても見えないのは
存在すらない回答。

「じゃあ、頼んだよ。000014580号」

目の前の誰かが何かを頼んでいる。

それは誰だ？ 分からない。そもそも僕に頼んでいるのか？

「……………はい」

なんとなくしに、意識的にでなく、返事をした。

すると、何もわからないまま、何を認識するでもなく、僕はどこかへと放り出された。

「全ては、————のために」

どこへ行くのだろうか？

どこでもいいや、と、思う。

どうせ今の僕は何もわからない。

どこへ行こうと、どこにいるのかなんてわかりやしない。

そうして、僕は————地面に激突した。

そこでようやく、僕は、自分がもっと高いところにいたのだと分かった。

そこでようやく、僕は、自分の身体が異常なほどに頑丈なのだと分かった。

そこでようやく、僕は、自分が異常と認識できる常識があるのを、分かった。

僕は立ち上がった。

立ち上がって、辺りを見回してみた。

どうせ知らない場所だ。

僕が知ってる場所なんて、この世に無い。

なぜなら、僕は、いつの間にか記憶を失っていたのだ。

歯車に巻き込まれる者（後書き）

勉強ヤバイ、ヤバイよ、勉強マジヤバイ。

努力しても成績上がんない、マジヤバイ。

偏差値60とかスゲームズイ。っーかムリ。

とにかく、頑張らないとヤバイのに、己れは何やってんだろっな……

……。

とか、思う今日この頃なのでございます。

回る空

僕が落ちたのは、街の中、大通りだった。けれど、その街は、およそ活気づいたものとは程遠い。

大通り沿いには何かの砲撃に巻き込まれたかのようなビルがあった。

路地の向こうには倒壊した家屋がいくつもあった。

道路のあちこちは爆発で焼け、陥没し、泥にまみれた水道水を涙の代わりにこぼしている。

ここから判断するに、割と最近、何者かによって破壊された街なのだろう。

「ん、生き残りがいたか」

用途不明の仮面をかぶった、謎の集団が、突然僕の前に現れた。なぜだかは分からないけれど、僕の腹の底から不快感がこみあげてくる。

——こいつらがたまらなく、憎い。……殺してやりたいほどに。

「いや、『エリート』じゃないのか？ さっきフォーマルティアが上空を通過した」

知っている。フォーマルティア。

アーセラーナ・フォーマルティア。空を泳ぐ魚だ。

それが、こいつらと、何か関係があるのか？

「さて、お前さんは、何号だ？」

何号？ 名前じゃないのか？
分らない。

「なにそれ？」

口を開いた拍子に、思わず呟いてしまった。
しまった、と思った時にはもう遅い。

「なるほど、敵だな。俺たちの敵」

周辺にいる仮面をかぶったヤツらが一斉に僕の方へ銃口を向ける。
中にはいかにもゴツい感じの武装もある。それが何なのかは分からないけれど。

とにかく、当たったら痛そうだ。

僕の判断は一瞬だった。

あれから放たれるであろう弾に当たりたくない。

回避はほぼ不能、ならば、発射を未然に防ぎ、その後、回避可能な状況まで持つていくしかない。

重要なのは、この場にいる全員に衝撃を与えること。そして今使えるのは己の身体のみ。

気が付いたときは、僕の身体はすでに動いていた。

うねる地上

向かうは一際前に出てきている隊長格らしき者。

そして今、懷に潜り込んだ。こうなればもうこちらのものだ。

「せやああああ!!」

力いっぱい、ぶん殴った。

腹にぶち込まれた拳は、隊長を軽々と吹き飛ばし、その筋肉質な肉体に鮮やかな放物線を描かせる。

そして、彼らが原因でできたであろう、水たまりへ墜落する。

続いて、驚いている連中のうち、当たりをつけた1人の顔面に裏拳を叩き込む。

仮面は軽々と陥没し、内部の人間にも直接的なダメージが加わった。

その者は地面を転がりながら、武器を取り落とし、その後、痛みに悶える羽目になった。

僕がぶん殴ったのはデカイ砲を抱えているヤツだった。

用途は不明だけど、毛色が違う兵器を持つてる敵も、指揮官と同等に優先して倒すべき相手だ。

同じ性能の兵器ばかりなら、連携は取りづらいし、何より戦術が大幅に制限されるからだ。

——残りはあと何人だろう？

戦う意思のある者を全滅させないと、僕は死ぬしかない。
目を皿にして、残りの集団を見やる。

1、2、3、4。

残りは4人、だ。

そして、隊長が倒れた後の指揮継承はうまく進んでいないらしい。誰もが、啞然としたままだ。

僕がもう1人の顔面をぶん殴った時点で、ようやく向こうにも動きが見えた。

「うわあああ！」

けれど、そこには指揮官がいない影響が如実に出ていた。各々がばらばらに銃弾をばら撒く。

そんなものに当たってやるほど、僕は親切じゃない。

僕は、銃弾を躲す。

正直、自分の身体能力が異常なのは分かっていたが、ここまでできるとは思ってもいなかった。

敵の銃弾を、躲して、躲して、躲して、躲す。

弾が切れて、銃撃が止めば今度はこちらの反撃だ。

手近な1人に蹴りを入れる。

吹っ飛ぶ。

もう1人にはパンチ。

吹っ飛ぶ。

最後の1人にはチョップ。

悶えて地面をのたうちまわり始めた。

ああ、終わってしまえば、なんだか簡単だった。

僕は早足で、逃げるように、ここから離れた。

こんなワケの解らない人たちのいる場所からは一刻も早く立ち去りたかったからだ。

うねる地上（後書き）

だれかがお気に入り登録してくれた、わーい。

これからもがんばります！

平日はほとんど更新できないでしょうけど、がんばって完結までこぎつけ……………たいなあ。

存在を定義すること

僕は街を歩いていた。

どこかしこも、破壊され、まともに機能しているようには思えない。

景色が変わらない、とは言わないが、生きている街と違うその風景は、僕に否応なく同じようなイメージを持たせる。

人も、さっきの1団と出会ってからこっち、まったく誰にも会っていない。

この町は——死んでいた。

「なんで……………何で、誰もいないんだよ……………」

疑問を虚空にぶつける。元より返事は期待していない。ただの愚痴だ。

そして返事が返ってきた。

「知りたい？」

その声は女性のものだった。

僕が振り向くと、予想通り、そこには女性が立っていた。

美しい女性だった。髪は金色で、背中にかかるくらいまで伸ばしている。瞳は青、サファイアを連想させるような、きれいな青だ。

「誰……………」

正直、彼女が誰でもよかったけれど、何とはなしに、疑問をぶつける。

「私？ 私は『ナクア』、あなたは？」

ナクアと名乗る女性は、名乗るだけの簡単な自己紹介の後、僕に名前を尋ねる。

でも、僕の名前は……………誰が知っているんだろう？
分からない。

この世界の、自分以外の誰かしか知らない。
いや、もしかしたら、誰も知らないのかも。

僕は――。

「僕は……………誰だろう？」

目の前の彼女に問うてみた。

知っているはずはない。答えなど期待していない。

「知らないよ」

字面は素っ気ないけれど、どこか温かい雰囲気をする声で、彼女は返事をする。

「分からないの？」

まるで迷子になった幼児に話しかけるように、彼女は言葉を続けた。

そして、彼女の言う通り、分からなかった。

自分がどの誰で、何をしていたのかも、何もかも。

今ある記憶は、高い所から落ちたこと、6人の敵意ある人たちと出会ったこと、そして今、この女の子と話している記憶だ。

社会常識なら残っているらしいが、あまりあてにはできない。そもそもそれが役立った記憶がないのだから。

「分からないから、そっちで適当に決めちゃって。名前」

我ながらなんていい加減なことをするんだろう、と思う。

失った名前を取り戻そうとしないばかりか、命名権を他人に丸投げしてしまうなんて。

でも、彼女に決めてもらうことに抵抗を感じてはいない。

——むしろ、僕は彼女に決定してもらいたがっているのかもしれない。

自分が何であるのか分からない、ひどく曖昧な僕自身を、決定してもらいたがっているのかもしれない。

そして、彼女は少し驚いたような表情を見せた後、「仕方ないなあ」とでも言い出しそんな笑みを浮かべ、わずかばかり思案する。

「じゃあ……………『レイト』で、どう？」

そして今、彼女の言葉が僕に届く。

この瞬間から僕は『レイト』となった。

存在を定義すること（後書き）

今回でエリオンさんがレイトさんになりました。

沈む屍の街

「じゃあ、レイト、さっきの話だけど」

ナクアは、手ごろな高さの瓦礫のほこりを払い、そこに腰かけながら言う。

「さっきの話？」

訊ねてから思い当たった。

なぜこの街に人がいないのか、だった。

「どうしてこの街に人がいないのか、でしょ？ 答えはとっても簡単」

彼女は一瞬空を仰ぎ見て、視線を戻す。

彼女が一瞬見た先を、僕もつられて仰ぎ見た。

すでに相当遠くに行って小さくなった、アーセラーナ・フォーマルティアが見えた。

そして彼女はそれを指さして、言う。

「アレがみんなを殺しに来たから、みんな逃げたの」

「な……………？」

何が何か、分からなかった。

アーセラーナ・フォーマルティアが街を破壊したなんて話は聞いたことが無い。

いや、記憶を失ってるから当然なんだけれども、僕の社会常識の

中に、それは含まれていなかった。

——アーセラーナ・フォーマルティアは人を襲う——

この概念は僕の中に無かった。

「えっと……正確には、アレが直接攻撃をかけたわけじゃないわ」

「そうなの？」

「うん、正確に言うと、適当な人間を捕まえて、洗脳して、地上に下ろすの」

何が何だかわからない……………。

そもそも……………。

「空間限界は？ 人間は高度3000メートルまでしか登れないはずでしょ？」

空間限界とは、この世界における現象の1つで、生物にはそれに応じた空間が与えられており、それを越えた範囲で活動することはできない。

越えようとすると、見えない壁に押し戻されてしまい、機械を使つて無理やり越えようとすれば、潰れてしまう。

この空間限界、無生物には働かないため、機械類には何の外傷も無いのに、中の人間はひき肉になっていた。という実験結果がデータに残されている。

また、先述したとおり、生物に応じた空間が与えられているため、

例えば鳥などは人類よりもずっと広く、高い地点にまで到達できるが、『生物の種類』でなく『生物ごと』に差がある。つまり個体差もあるのだ。

空間限界が低いため、高くに行けず、無理に上がろうとして死んでしまう渡り鳥は決して少なくない。

同じように人間でも、登山を趣味としていたのに、名峰の頂上にたどり着けない、なんてこともあるのだ。

ちなみに、人間の空間限界はおよそ高度3000メートルまで、地中は場所にもよるため不明。

そして横幅は『世界の中心』と呼ばれる場所から半径8000キロメートル。

これが人類の『限界』である。アーセラーナ・フォーマルティアには永遠にたどり着けない。

「関係ないわ。そもそも空間限界なんて、アレが創ってるんだもの」

長年の研究者たちの謎に、この目の前の少女はあっさりと回答を提示してみせた。

この少女は、どうしてそんなことを知っているのだろうか？

「話を戻すね。フォーマルティアは、洗脳した人を使って、この街を破壊したの」

「どうして？ 目的は？」

「わからない、けど、間違いなく言えるのは、アレが人類を抹殺しようとしてること」

「じんるいを、まっさつ……………」

これには何か、聞き覚えがあつた。

そうだ、あれは、高いところから落ちる前……。

—— 全ては、全人類の消滅のために ——

そんなことを聞いていたような気がする……。

あの場所が、アーセラーナ・フォマルティアだったとすると、辻褄はあう。

でも、どうして彼女はそんなことを知っている？

いや、そもそも、彼女みたいな女の子が、みんなが逃げ出して、殺人鬼が跋扈する街に居ること自体おかしいじゃないか。

「君は…… どうしてそんなことまで知ってるの？」

もしかしたら——。

「私は、フォマルティアで洗脳されて、身体の改造までされた」

想像通りの答えが返ってきた。

言葉自体はスラスラと出していたが、彼女の表情は苦々しげだった。

聞いてから、しまった、と思つてももう遅い。

「あ、でも、もう洗脳は解けてるから、人を殺したり、レイトを攻撃するつもりは、ないよ」

分かってる。

そもそも洗脳されてたらこんなことまでしゃべってくれないだろう。

「それは、レイトも同じでしょ？ ケースは違ってみただけだ」

「落ちてくるところから、見てたもの」と言う彼女に、僕は困った顔をするしかない。

改造された記憶も、人類を抹殺するよう洗脳された覚えも、ないのだから

「分からないよ……」

何も分からないまま、「お前はこういうヤツだ」と言われても、実感なんて湧きやしない。

「だって——何も思い出せないんだ」

「……………そう、なんだ」

彼女もある程度見当はついてたのだろう。驚いた様子は無い。ただ、反応には困っているらしい。

「えっと、その……………そういえばさ、君はどうしてこんなところに？」

「ん、それはね」

彼女は瓦礫の椅子から立ち上がると、足元にあった手のひらサイ

ズのコンクリート片を手取る。

「こういうことしたから、だ、よ！」

ナクアの手からコンクリート片が離れる。

すさまじい勢いで、僕の隣を通り過ぎ——僕の背後で銃を構えていた仮面の集団のうち1人に命中した。

そして、彼女はその仮面の集団に突っ込んでゆく。

沈む屍の街（後書き）

なんとなーく、設定が仮面ライダーに似てるような気がしなくもない。

改造手術を受けた主人公とか……。

余談ですが、空間境界の説明時、オリジナルの単位を作ってもよかったのですが、ややこしくなるだけなのでメートル法を採用しました。

踊る人形の群れ

飛びかかったナクアに対する仮面連中の対応は早かった。

統率のとれた動きで、火線をナクアの華奢な体に集中させる。

《呼び出しを確認。^{アクセス} G r ^{ゲラート} T 通常起動》

しかし、彼女の力はその遙か上を行っていた。

弾が放たれる直前、ナクアが立ち止ると同時、彼女の手が鋼鉄のグローブに覆われる。

弾着直前に、彼女が右腕を突き出す。

——そこからは何が起こしたか、認識できなかった。

強烈な風と、大量の砂埃が舞い上げられたことは理解できたが、それだけだ。

砂煙が収まった時、僕は結果だけを知る。

弾丸、砲弾は彼女にただの1発も命中しておらず、仮面の連中は消え失せていた。

そして、何かの衝撃にやられたのか、僕から見て、ナクアから向こう、道路は弓なりに陥没し、道路両脇のビルはあり得ない形にひしゃげていた。

——およそ、人間業とは思えなかった……。

「分かってもらえた？」

「う……………うん」

彼女が何をしていたのか、それはとても単純だった。

彼女は戦っていたのだ。自分の同類と。

「君は……人類を守るために、戦ってるんだね……」

「え……………？」

僕がそう言うと、彼女は大層意外そうな顔をした。
まるで、「どうして人類なんかを守らなきゃいけないのか」とでも言い出しそうな表情だ。

「違うよ、人類のためじゃない。ただの私怨」

彼女は自嘲気味に言う。

「自分はそんな高尚な人間じゃない」とでも言いたげに。

「ただ、フォーマルティアの思い通りにさせたくないだけ。アレの邪魔をしたいだけ。それにね……………」

ナクアは突然、空を仰ぎ見て、言葉を続ける。

「人類が、私に友好的だなんて言った覚え、無いよ？」

踊る人形の群れ（後書き）

ナクアさんのキャラがいまひとつ定まらない今日この頃。

鋼色の感情

「市内全域の確認、終了しました。『一般』が83、『エリート』は2、『変わり種』が4です」

「一般がやけに少ないじゃないか？」

「その代わり、エリート2体ですからね。奪還には相当の被害を覚悟しないといけませんよ」

「正面切つての戦いは挑むべきではない、と進言するべきかな？参謀殿？」

「そんなことは分かっている、進言してくれるな」

「だろうね。こちら側の戦力は、充分とは言えない。増援の要請をするべきじゃないかな？」

「すでに申請してある。6時間後に合流の手はずだ。それまでに1度攻撃をかけるぞ」

「この戦力でかい？」

「いや、実は増援のついでに、面白いモノを先行して受領した。『評価試験をしてくれ』とのことだ」

「また『新兵器』かい？ 上も好きだねえ」

「そう言うな。とにかく、これと、既存の機動装甲を合わせて運用

する。何とか2個小隊くらいは編成できるだろう。エリートの相手はせず、変わり種だけを排除する方針で行こうと思うが、どうかな？」

「ま、いいんじゃない？ 僕は反対しないよ。それに、僕は作戦参謀じゃないし。関係ないだろう？」

「いや、大アリだ。お前は私の『友だち』だからな」

「やれやれ。妙なのに好かれたもんだね。僕も」

「諦めろ」

鋼色の感情（後書き）

今回は会話文だけの文章になりました。

新感覚、だけどダメかも、と作者自身が思ってしまう始末。

もうこんなことしないですよ。そして時間があつたら情景描写付きで書き直ですよ。

降る雨の色は

彼女が見た先を、僕も見る。

さっきまでそこには小さくなったフォマルティアがあった。

今は、鉛色の何かで埋め尽くされていた。

どうやら僕は視力も異様によくなっていたらしい。

その鉛色の何かのひとつひとつの形状、質量、軌道までもが手に取るようにわかる。

どう考えても街の外——すなわち人類の勢力圏内——から放たれていて、しかもそのほとんどが僕らのいる地点を狙っていた。

「ね？」

ナクアは絶望するどころか、むしろ楽しそうに僕の顔を覗き込む。

「な、ななな……………」

僕は動揺のあまり、まともな返事すら返せない状態だ。

「こつち」

ナクアが僕の手を掴む。

そして、彼女に手を引かれるまま、僕は裏路地へと入り込む。

弾着、そして爆発。

さっきの仮面集団の弾幕がお遊びのように思える威力だった。

僕らが隠れ蓑に使う建物と言う建物すべてが破壊され、しかも、その攻撃は当分休まりそうもない。

「それでも弱い方だよ」

啞然とする僕を諭すように、彼女は事実を突き付ける。
あまり知りたくない事実だった。



人類側の陣営では、街全体の生体反応がレーダーで監視されていた。

「エリートの動きは？」

「おおむね予想通りの動きですが……マズイですよ。変わり種の方が接近をはじめてます」

「合流されると厄介だねえ。どうされます、参謀殿？」

まるで「その時は責任取りたまえよ、キミ」とでも言いたげなイントネーションで、この参謀殿に訊ねるのはこの隊の副隊長だ。

「作戦続行だ。砲撃継続。エリートは無視、変わり種を叩け。アレが無くなるだけでも後は随分楽になる」

彼は終始落ち着いた口調で、参謀として、隊長として、指示を飛ばす。

降る雨の色は（後書き）

この小説の1話分、少し短いかも。とか思い始めました。
増やした方がいいのでしょうか？

巨人と巨人

「この砲撃、止まんないの？」

最初の弾着からこつち、鉛色の雨は止む気配が無い。

ナクアの誘導は見事なもので、いまだに1発も命中していないけれど、いい加減嫌になってくる。

「一気に跳べば、多少は時間稼げるよ？」

「じゃあそれで、お願い！」

「うん、わかった」

彼女が言うのが早いのか、僕は浮遊感に包まれた。

強烈な力がかかっていたのであるうことは理解できるが、痛みも何もなかった。

「ねえ、レイト。ちょっといい？」

「うん、何？」

気が付けば、眼下に爆発と土煙が見えた。

砲撃を見下ろせるほどの高度にまで到達したらしい。

「レイトは帰る家、無いんだよね？」

「う、うん……」

彼女が次に何を言い出すのか、おおよその見当はついていた。
そして、それに対する答えも、僕はすでに用意していた。

「じゃあ、私と、一緒に戦って。私と一緒に、フォマルティアと戦
って」

「……うん！」

これが僕の答えだ。

どの道、フォマルティアからも、人類からも、追われるんだ。
それなら、この見ず知らずの女の子を信じて、一緒に戦うのも悪
くない。

彼女は僕の顔を見て、顔をほころばせる。

「ありがとう——レイトは私の初めてのパートナーだよ」

このまま地獄の底に突っ込んで、崩れそうにないほど、力強い
笑みを浮かべ、ナクアは僕の手を引く。

そして、僕の顔に自分の顔を近づける。

——唇に、柔らかい感触が伝わる。

「これから、どこまでも……私と一緒にだからね」

それから程なく、高度が落ち始めた。

だんだんと地面が近づき、近づくたびに加速してゆく。

物理法則とは残酷だ。

地面からの投射を行った場合、接地時に持っている運動エネルギーは、投射時のものと変わらない。

空気とかの摩擦力を完全無視した場合だが、それを考慮しても、充分にすごい勢いであることは、跳躍時に分かっている。

けれど、不思議と恐怖は無かった。

地面と足が接触する。

アスファルトを破壊し、下の水道管をも破壊し、土砂の大盤振る舞いをしながら、僕らは着地した。

「……………ありゃ？」

土煙が晴れる。

僕の目の前にいたのは、いかにもな感じの巨人。かなり凶暴そう。

僕は振り返る。

僕の背後にいたのは、いかにもな感じの人型ロボット。かなりかっこいい。

「まずいところに、着地しちゃった感じ？」

一番先に動いたのは、僕らでもなく、背後のロボットでもなく、目の前の巨人。

ものすごい勢いで接近して、拳をぶつけてくる。

「うわっ！」

反射的に僕も拳を突きだす。

——拳と拳がぶつかり合う！

常識で考えれば、僕の方が一方的に潰されておしまい。
だけれども、現実はそのようじゃなかった。

僕の拳は、巨人の拳とぶつかり合い、潰されるどころか、拮抗していた……。

巨人と巨人（後書き）

明日に取っときたかったけど、今日投稿。

そろそろ設定が固まってきました。

金属製の手

《レーフェル1よりCP。^{コマンドポスト} 敵の様子が変だ》

通信が入ったのは、変わり種と交戦していたレーフェル小隊からだ。

「こちらCP。どうした？」

《いや、その……仲間割れ、か？ エリートと、変わり種が戦闘を始めた》

通信を受け取った通信士は何だそれは、と思う。

だが、この通信士以上に、現場にいるレーフェル小隊は困惑していた。

《どちらを攻撃すればいい？ 指示を》

「どうした？ 何かあったのかい？」

通信士の異常に気付いた副隊長が通信士に問う。

通信士は先ほどの会話を説明した。

「さて、こういうのは参謀殿に聞くのが早い。どうされるのかな？」

副隊長は、責任を丸投げするように、背後の上司に話を振る。

「退避だ退避。無駄に消耗するな」

その上司の指示は迅速だった。

その指示に従う通信士の仕事もまた、迅速だった。

「CPよりレーフェル1、後退しろ、それに関わるな」

《了解、後退する！》

通信が一旦途切れた。

「どう見る？ あの状況」

「連中の考えなんぞ分かるものか。ただ、願ってもないチャンスだ、
としか言いようはない。

連中が仲間割れ——うまくいけばこの作戦、ずっと楽になるぞ」



拳同士がぶつかり合い、拮抗。
数秒でお互い拳を引く。

「力は五分みたいね。レイト、『支給品』の使い方は分かる？」

「何それ？」

続いて2撃目。今度は叩き潰そうと、拳が振り下ろされる。
そう何度もさっきのように受けてはいられない。そんな義理もない。
い。

僕らはバックステップで躲す。

ただでさえ着地の衝撃で陥没していた地面が、さらに陥没する。

「やっぱり覚えてないか……じゃ、教えるね。『拳に金属製のグローブがある状態』をイメージしてみて」

僕らが着地する頃、3撃目が放たれていた。

1撃目と同様の、右ストレートだ。

「分かった！」

金属製のグローブ――。

僕は、さっきナクアが使ったあの拳を想像した。

あれなら鮮明に覚えている。

《呼び出しを確認。アクセス G r グレート T 通常起動》

何かが右腕で組み上がる感覚、そして、使えた、という実感。

僕の手に鋼色のグローブが装着される。

拳と拳の衝突。だが、今回は拮抗しない。

――僕の拳は巨人の拳を破壊する。

そして、その拳を破壊しただけでは飽き足らず、その腕を破壊し、その肩までをも粉碎した。

血と肉、そして砕けた骨が散乱する。

そして、力の余波が巨人そのものを吹き飛ばした。

巨人は地面を転がっている間も、静止してからも、何が起こったのかを理解できていない様子だったが、しばらくしてから、今更のように、すさまじい痛みに悶え、のたうちまわり始めた。

巨人の大きさは2階建ての家くらいだ。

そんな巨体が大暴れし始めたものだから、そこらじゅうの建物――もう使い物にならないであろう建物が大半だけれど――が破壊される。

舞い上がる瓦礫、吹っ飛ぶ鉄骨、非常に迷惑だ。

「レイト、もう一発。止めを」

僕はナクアの指示通り、装着されたままの金属の拳を構え、そして――放つ。

巨人の首に、僕の必殺の右拳が極まる。

まず頭が原形も残さぬほどぐちゃぐちゃになり、吹き飛んだ。

次に、胴体の肉が、骨が、崩壊を始めた。

肩から先が弾かれるように吹き飛び、胴体に入った亀裂から臓物が溢れ出す。

溢れ出した臓物はG・Tの衝撃により、ミキサーにかけられたように、赤い液体へと成り果てる。

すでに片腕を失っていた巨人は、全てが終わるまでに、その機能を停止していた……………。

金属製の手（後書き）

ジャンルをファンタジーに変えました。

書いてて思いましたけど、なんか、SFっぽくないし……。

金属製の兵士

巨人が屠られる瞬間は生体レーダーで観測されていた。

「変わり種1体の反応、消失しました。エリートと交戦していたものです」

CP内部では、誰もが「予想通りだよ」とでも言い出しそうな表情で事実を受け止めていた。

「こちらの部隊は？」

「レーフェル隊は一般部隊と交戦、24体を撃破、被撃墜は無し。弾薬消耗率は12パーセント。オブリデアノ隊は変わり種と交戦中。被撃墜2、パイロットは離脱しました」

副隊長は芳しくない状況だ、と思う。

小隊は4機編成。2個小隊だから、こちらの戦力は残り6機。

レーフェル隊がほぼ無傷なのが救いか、と思うものの、楽観はできない。

——何せ、敵は怪しげな技術を持った、謎の部隊なのだ。

その所属も、目的も、技術の出所も、何もかもが不明。

突然現れたかと思えば、何の躊躇もなしに街を破壊する暴力主義者どもだ。^{テロリス}

敵戦力は仮面を被った『一般』、規格外の力を備えた『エリート』、そして、地球上の生命体が疑わせるような外見の『変わり種』。

この3種類だ。

なぜエリートだけ外国語を用いるのだろう？ という疑問は部隊内部でも後を絶たないが、そう決められてしまった以上仕方ないことだ。それに、別にそれで実害が出るワケでもない。

「オブリデアノ隊、変わり種を撃破しました。被撃墜2、中破1、撤退申請が出ています」

「申請を受理。撤退させる。レーフェル隊は？」

「一般と交戦中のようです。27を撃破、被撃墜無し」

「下がらせる。オブリデアノ隊のケツを守ってやれ」

「了解、下がせます」

「エリートへの砲撃再開はもう必要ない。準備している部隊に通達しろ」

「了解」

指示を出し終わるのを見計らって、副隊長が声をかける。

「新型の感想は？ 評価出さないといけないだろう？」

「ダメだな。あんなモノではエリートに敵うまい」

無茶な注文だ、と副隊長は思う。

だが、その注文を満たすモノを配備してもらえなければ、自分たちは遠からず死んでしまうということも、彼は分かっているつもり

だった。

「今回は仲間割れに助けられたが、本来ならレーフェル隊は壊滅だぞ？」



「——っはあああああ………！」

僕は大きく息を吐いた。

脚と、左腕だけになってしまった、巨人だったものを一瞬見やる。音はなく、ただ静かに、地面に血を吸われていた。

「よくできたね。でも、まだまだこれからだよ」

ナクアは、うれしそうに、笑みを浮かべながら、僕の頭を撫でてくれる。

子ども扱いされてるみたいだったけれど、不思議と嫌ではなかった。

「レイトはこれから、もっともっと、もっともーっと、強くなってくれないと」

彼女のにこやかな笑顔は、およそ、これから底なしの戦いに出向く者とは思えないような笑みだった。

しばらくして、僕が落ち着くの見計らって、彼女は言葉を紡ぐ。

「そのためにはとりあえず、支給品の使い方、知つとかないかね」

G r Tとかいうもの以外にも、まだまだあるらしい。

「……説明は後回しでもでいいか。実践する相手には困らないし、使ってみよ」

ナクアが振り向く。

その先には、仮面を被った一団と、巨大な………トラ？ ライオン？ とにかくネコ科らしき姿をしたものが、規格外のサイズをもって迫って来ていた。

「G r Tは遠方の雑魚を一掃するには充分だけど、距離を置いた『ミュータント』には効かないわ」

ミュータント、と言うのが、例の巨大な連中の総称なんだろう。

「じゃ、どうするの？」

「G r T装備状態の腕を突きだして」

言われるがまま、僕は右腕を突きだす。

「何でもいいわ、遠距離を攻撃できそうなものをイメージして」

何とはなしに、僕は長大な機関銃を想像していた。

《呼び出しを確認。 アクセス D r S 通常起動》

どうやら成功らしい。

何かが組み上がるあの感覚が、成功したというあの実感が、再び

身体を駆け巡る。

そこには、僕が想像したモノとは少し違うデザインの機関銃が、二脚をたわませながら、僕の掌にグリップを握らせていた。

「成功ね。使ってみれば、威力も分かるわ。やってみて」

僕は、迫りくる一団に照準を合わせ、引鉄を落とした……………。

金属製の兵士（後書き）

サブタイトル考えるのしんどいです。

あと、ジャンル変えたら伸びました、
凄いな、ファンタジーの力。 閲覧数。

電撃雷撃砲撃思考

僕が引鉄を落とすと同時、待っていましたと言わんばかりに、猛烈な速度で弾丸が装填されてゆく。

装填される端から、銃口へと誘導され、吐き出される。

電磁式のこの機関銃は発射音はほとんど無いに等しい。

装填されるたび、ローレンツ力ですっ飛んでゆく、ただそれだけ。薬莢すら排出されない。

攻撃しているという実感はほとんど残らなかった。

そんな実感の無い状態の僕に無理やり実感を与えたのは、最初に放たれた弾丸だった。

弾丸は瞬く間に眼前の集団——2キロほど先だろうけど——と距離を詰め、着弾した。

それと同時に爆発、それと同時に僕は認識する。

——これは、機関銃じゃない！

機関『砲』だ。発射されてるのは弾丸じゃなく、砲弾だ。

しかし、僕がいま手にしている武器、そのデザインは間違いなく歩兵の用いる機関銃のそれなのである。

驚きで僕は引鉄を戻した。

装弾システムがやる気をなくしたように止まり、砲弾の発射も止まる。

しかし、放たれた砲弾が戻ってくることはない。

次々と着弾、火柱が上がる。

何発命中しているのかは、分からない。

けれど、今あそこはこの世の地獄と化しているであろうことは、火柱の大きさから容易に想像できる。

最後に発射された砲弾が着弾するまでしばらくかかった。^{2秒ほど}

そして、火柱、土煙共に消え失せた頃には、何も残っていなかった。

敵の姿も、道路の舗装も——あるのはぺんぺん草も生えそうにない荒地だ。

「うんうん、いいよ。この調子で全部使いこなせるようになるうね」
僕が啞然とする中、ナクアだけが飛び跳ねそうなくらい喜んで
いた。



「変わり種、さらに1体が消滅しました。エリートの方へ向かって
いたものです」

副隊長は、報告に驚いた。

エリートがわり種を攻撃したのは、あくまで裏切り者の排除だ
と置いていたからだ。

なぜならば、エリートは2人、常識的に考えれば裏切り者は少数
の方だ。

だが、報告によると、どうも違うらしい。

裏切っていたのは、変わり種でなく、エリートのようなのだ。

エリート2人が離反？

可能性としてあり得ないことは話にも聞いていた。
エリートの中にも裏切り者がいると。

最初にその事態に遭遇したとき、その判断が信じられなかった我が方の指揮官は、その裏切ったエリートを排除しようとしたらしい。結果は惨憺たるもので、その隊は1人残らず死亡した。脱出できた者はいなかった。データが残っただけだ。

そのエリートは度々戦場に現れては、敵を蹴散らし、帰ってゆく。露骨に手を出せば、その部隊は残らず平らげられる。そんな話は、前々から聞いていた。噂レベルで。

それが、このエリートだとすると、話が合わない。
なぜ2人なのだ？

自分の持ちうる思考能力で可能性を羅列してみた。

- ・ 噂が誤っていた。
- ・ 新たに1人離反した。
- ・ まったく関係の無い2人組。

ここまで考えた時点で、今はそんなことは問題ではないだろう、と思う。

今、彼らはここにいて、我々の利益になることをしてくれている。

それでいいではないか。

手出しされない限り、放っておけばいいではないか。

どうせ彼らへの攻撃指示は無いのだから……………。

電撃雷撃砲撃思考（後書き）

何だかんだで毎日投稿してるじゃん！　とか思っていました。
正直びっくりだぜ……なのですよ。
ホントはこんなことしてる場合じゃないのになあ……………。

香りと臭い

「今日はこんなところかな。帰ろっか」

気が付くと、Gr TもDr Sも消え失せていた。

どうやら、使ってる本人が『必要ない』と考えた時点で消える仕組みらしい。

「レイトも来るよね？」

ナクアの青い瞳が僕の顔を覗き込む。

一瞬僕は迷ってしまう。

つまりこれは……その………女の子の部屋に泊まり込むってことになるワケで。

「うん……うん………」

けれど、他に行くアテなんか無い。

戸惑いつつも、僕は彼女の申し出を受けた。

「でも、どうやって帰るの？」

それは気になった。

たぶん、このあたり一帯は、軍隊に包囲されていることだろう。

人類側が僕らに友好的でない以上、まともに出してもらえんとは考えづらい。

「こっするの」

彼女は手近にあったマンホールのフタをこじ開けた。
そして、ためらうことなく中へ飛び込んだ。

「え、ええっ？」

中からはものすごい臭いが漂ってくる。
こんな中を平気で進めるのか、彼女は。

「うう……………えいっ！」

意を決して、僕も飛び込んだ。

……………中に入ってしまったと、一転、臭いが消え去った。

「遅かったね」

ナクアが笑みを浮かべつつ、ランタンを掲げ、僕の顔を照らす。

「それは？」

どこから出したのだろうか？

「Z S I。支給品。明るくするだけじゃなくて、身体に有害な
ガスを取り除く効果があるの。臭い含めて、ね」

なるほど、それで臭いが消え去ったんだ。
僕は自分でもランタンを想像してみる。

《呼び出しを確認。Z S I 通常起動》
アクセス

僕の左手にランタンがどこからともなく出てくる。

「うまいうまい。レイト、才能あるよ」

また頭を撫でられる。

嫌じゃないんだけど、何だか気恥ずかしい。

「い、行こっか」

気恥ずかしさのあまり、僕は彼女よりも前に出てしまつ。
道分かんないのに……。

「そっちじゃないよ。こっち、こっち」

気づけば、予想通りの失敗をかましてしまっていた。

「これ、これだよ」

そう言つて、彼女が指差すのはケープ状の……退避機かな。

「はい」

手渡されるけれども、ここには1着しかない。

このままじゃ2人で帰れない。

「じゃ、もう1着探さないかね」

「ううん、大丈夫」

ナクアは、僕にケープを着せると、下から自分の頭を突っ込んだ。

「こうすれば、2人一緒に使える」

胸が異様に膨らんだケープを着た少年が誕生した。

「行き先の座標は設定してあるから、すぐ使えるはずだよ」

言われるがまま、起動。

彼女の言った通りだった。すぐに景色が変わる。

薄汚い下水道から、殺風景な寝室へと、景色が変わる……………。

香りと臭い（後書き）

『かおり』って言ったらしいイメージがありますが、
『におい』って言ったら何だか悪いイメージがありますよね。
いいにおい、とか言うのに。

他力本願

「エリート2体の反応、消えました!」

「何!？」

しばらく不自然な動きをしていたが、ここにきて突然消滅とは…。

「落ち着け。大方、退避機が何か使っただけだろう」

そうだ。

相手は知性を持った者たちだ。ただの動物とはワケが違う。

「つまり、もうエリートの心配はしなくていいってことかな？」

「いや、警戒は続ける。援軍が到着した時点で勝負をかける」

だが彼にも分かっているだろう。

万に一つの可能性で彼らが留まっていたとしても、無視すればいいだけだ、と。

少なくとも、あのエリートは敵ではないのだから。

他を全滅させても最後に残ったエリート1人に全て食われるという話は珍しくない。

だが、今回はそのエリートが味方側になってくれた。

いや、正確には味方側ではないが、結果として我が方の利益になることをして去って行ったのは間違いない。

久しぶりに勝機ある戦いだな、と思う。

エリートが出てくればそれだけで壊滅的な被害が出る。

今回はそれが無い。それどころか、敵戦力もほとんど残っていない。

圧勝はもう目前だった。

「帰ったら、一杯やろうか」

「ふ、いいだろう、私のおごりだ」

援軍到着まであと4時間を切った。

もう少して、この街は奪還できる。

日はすでに傾き、美しい夕焼けが全てを赤く、朱く染めていた。

援軍の到着時間を考えると、夜になるまでにこの街を解放はできない。

けれど、明日の夜明け前までに、この街は彼らの手によって解放されるだろう。ほぼ間違いなく。

しかし、と副隊長は思う。奪還したとして、この街はもう、使い物にならないだろう。

機動装甲やエリートが散々暴れ回った後なのだから。

送力線——送電線のようなもの、電気だけではなく、様々なエネルギーを伝達する——も引き直さなければならぬだろうし、まず建物の被害が甚大だ。

復興計画は、大変なものになるだろうな。

「ま、僕には関係ないか」

そんなことは政治屋が決めればいい。
兵隊屋には関係ない。

——そして、この日の夜、制圧地区の敵はすべて駆逐され、
我が方の小さな勝利が記録に刻まれた。

他力本願（後書き）

これで第1章終わりです。

よくもまあ、ここまで続いたものです。

正直、途中で投げ出してると思ってました。マジで。

この先しばらくは、ラノベお約束なストーリーが展開する予定です。
毎日更新できるよう、頑張りますよ。そこそこに。

野生の国の扉よ開け

転移が完全に終了してから理解する。

ここが、ナクアの家なのだと。

「今日は疲れたね」

ナクアは僕から離れると、ひとつ伸びをし、そう言った。

「そうだね」

僕はそれを肯定する。

今日は本当にいろんなことがあった。

記憶を失って、殺されそうになって、かわいい女の子に会ったか
と思えば、家に招待されて……………。

ここまで思い立った時点ですごく思い出した。

ここはナクアの家で、つまりは女の子の家で……………。

「どしたの？ 顔真っ赤」

「わぁあっ！」

気がつけばナクアの顔が至近距離にあった。

あわてて顔を背け、床に伏せた。

頭の中で、思考にもならない思考がぐるぐると回り——回る。

「えっと……………レイト？」

どうやら、彼女の方も僕の奇行についてこれてないらしい。
まあ、当たり前だろうけど。

とりあえず落ち着くために深呼吸をする。
そのままの体勢で。

「すー、はー。すー、はー」

傍から見たら床の臭い嗅いでる変態になるんじゃない？
とか思ってももう遅い。

その辺はナクアも気にしなかったようで——気になっても、も
う聞けない空気だったし——何も言わない。

とにかく、落ち着いたので、顔を上げて、彼女に向き合う。
うん、僕、大丈夫だ。

「え、と——この家の中、説明しようと思ってたんだけど、い
るよね？ 説明」

もちろんだとも。

「うん、お願いしていいかな」

彼女も、僕が落ち着いたことを分かってくれたのか、割と安心し
た様子で家の中を案内してくれた。

「へえ、結構広いんだ」

まず驚いたのが、マンションとか、アパートとか、集合住宅の類じゃないこと。

1階建てだったけれど、彼女の立場からして、これは正直驚いた。

それに、結構な広さがある。

家具が少ないのもあるだろうけど、1人で住むには広すぎるくらいだ。

「正直、1人じゃ持て余してたから、レイトが来てくれてちょうどいいかも」

彼女は戸棚の中から予備のマグカップを引っ張り出すと、それを僕へと手渡して言う。

「はい、レイトのカップ。使う前に洗ってね」

「うん」

「それじゃ、私、シャワー浴びてくるね。レイトも来る？」

「ブフツ！？」

思わず吹き出してしまった。

彼女は――アレか？　僕を男と認識してないのか？

それなら、今までの行為にも納得がいく………………。まっただしぬけに、僕はあの町で交わした、口づけの感触を思い出した。

——ううん、彼女は、僕を男と認識してないんじゃない。

ただ単に、警戒心が無いだけだ。

僕に対してだけかどうかまでは分かんないけど。

「来るの？」

「いやいやいや」

据え膳くわぬは男の恥、とか言う（らしい）けど、この場合、ま
ずいだろう。

彼女とは今日会ったばかりなんだから。

——キスしてる時点で説得力無いよお！

「？ 先使っね」

床を悶えながら転がりまわる僕を後目に、ナクアはお風呂場に消
えた。

野生の国の扉よ開け（後書き）

この手のライトなパートは苦手です。

文章が普段に比べ一層拙いと自覚はしていますよ。

いざ勝負の時

結論から言ってしまうおう。

お風呂にいつしよに入ろうなんて提案、まったくもって、問題じゃなかった。

目の前には、ベッドが1つ。

布団の予備は無い。

「せっかくだから一緒に寝よ?」

目の前におわします、パジャマ姿の美少女はこのようにのたまっていていらっしゃるのですが……。

いやいや、彼女が変な意味で言ってるワケじゃないことは、僕もよく分かってるつもりだ。

だけど、その……あれですよ。

男女が閨を共にするって言うのは……………。

「どーしてもだめ?」

「いや、ダメでしょ」

僕の記憶、と言うか、社会常識では、その日に初めて会った人にするんじゃないって言うか、責任が生じるっていうか……………とにかくまずいでしょ!

「……………レイトのいじわる」

やめて！ そんな目で僕を見ないで！

.....。

.....。

.....。

再び結論から言ってしまうおう。
今、すごいヤバいです。

結局根負けした僕が一緒のベッドで寝ることになったのだけれど。

「ん.....」

隣の眠り姫は僕の腕に絡み付いて、その豊満なふくらみを、これでもかと言っくらい僕の肘に堪能させる。

傍から見れば天国か。こんな美少女が、僕の隣で無防備に眠っているのだから。

けれど、それは間違いなく地獄だ。

例えるならそう、眠らせないために、一定間隔で水滴を対象の頭に落とす拷問器具とかだ。

例えて何だけど、僕の社会常識にはこんなものまで含まれてるのかよ、と頭の中で突っ込む。

で、今当たってる先は僕の頭じゃなくて肘、当たってるものはふにゅふにゅと形を変える魔性の物体。

おかげさまで、僕の心臓は早鐘を打ちっぱなしで、落ち着くなんてとんでもない状況だ。

「……………」

僕の頭の中の悪魔がささやいた。

——少しぐらいの役得、いいじゃないか——と

僕の頭の中の天使がささやいた。

——いやいや、こらえろよ、紳士なら——と

この状況、反対側の手で、パジャマのボタンぐらい、簡単に外せる。

すべては僕の采配しだい。

僕が決定し、僕がその決定に責任を持つ。

もう後は僕の勇気だけさ。

さあ野生の国の扉よ開け、いざ勝負の時。

——なんてこと、考えてませんよ？

いや、ホントに。



結論。

結局何もありませんでした。

いざ勝負の時（後書き）

一応、これから毎日17時に投稿するつもりです。

やっぱり、定期更新がいいですね。

ただ、いつ途切れるか分かんないので、その辺はご容赦くださいな。

言い訳と弁明と言い訳と

《つまり、『ヴェイルゲズ』では、不満、と。そう言うことかね？》

「はい、この程度では、あの化け物どもには到底太刀打ちできません。現に撃破されてますしね。

そもそもこの機体、コストからしても、量産には向いておりません」

先程から我らが参謀殿は通信機の先、技術本部長相手に『新兵器』の報告を行っている。

その新兵器が配備されたのは変わり種と充分量交戦したオブリデアノ隊だったので、充分な評価用データは一通りそろっている。

結果として、新兵器は撃破されてしまったのだが、その性能に対する副隊長の個人的な感想は、驚き、の一言であった。

従来の機動装甲を大幅に上回る反応速度、それに伴う機動力の向上、バッテリーの容量増加、軽量化。

他にも、パイロットの生存性、緊急回避機の信頼性向上など、緊急時における安全性も充分な配慮がなされている。現行技術、しかも量産機でこれ以上を望むのは酷と言うものだ。

そもそも、撃破されてしまったというのも、パイロットが慣熟していなかった。この一点に尽きるだろう。

「以上から、この機体の量産は取りやめた方がよろしいかと」

《もっと安く、強く、と言うことかな？》

「ええ」

先ほどから弁舌をふるっているこの参謀に多少嫌気がさしている自分があることを、副隊長は認めていた。

なるほど、彼の言うことはもっともだ。強く、安い兵器があればこれに勝るものはない。

彼が理想とする、エリートを圧倒できるような夢物語のような兵器ならなおい。

だが、現場は、戦場は待つてはくれないのだ。自分たちは、明日、強力な武器を得るよりも、今日、普通でいいから武器を得ることこそが重要だ、ということを、彼は分かつて言っているのだろうか。

《参考にさせてもらおう。上層部がどう判断するかは別だがな》

この人も、分かつて言っているのだろうか？ と副隊長は思う。最前線に立つ自分たちからすれば、技術本部長である彼もその『上層部』の一員に他ならないことを。

言い訳と弁明と言い訳と（後書き）

あっちに行ったり、こっちに行ったり、ややこしいですね。すみません。

と言うか、今気づいたけど、副隊長が主人公格になってるような…。

……ま、いつか。

明るい日と書く明日

「う……ん……………」

朝、目覚めてひとつ伸び。

外を見ればカーテンの隙間から柔らかな、と言つにも少々弱い、この寒い時期特有の日差しが差し込んでいる。

そして、部屋を見れば、見慣れない部屋。

まあ、僕が見慣れた部屋なんて、この世界のどこにもないんだけど。

どこからかいにおいが漂ってきている。ナクアが朝食を作ってくれているのだろう。

僕は、もうひと伸びして、台所へと向かった――。

「あ、おはよ」

台所に入るなり、お皿に料理を載せながらナクアが迎えてくれた。

「顔洗ってきて。すぐご飯するから」

そう言いながら、彼女は市販のウィンナーを鍋の中に放り込む。すでにできているメニューを見る限り、アレが最後のようだ。

「ん、分かった」

僕は台所を後にした。

正直言つて、少しありがたかった。

なぜなら——さっきから、昨日のことがリフレインし続けていたから。

フラッシュバックつてやつだろう。

苦悶する、フォーマルティアの尖兵たちの、地獄から響くようなうめき声が、耳の中で響き続けていた。

彼らにも、彼らにも人生があつたはずだ。

こんな、僕や、ナクアに殴られてあっさり終わってしまう。そんな人生にならない可能性はいくらでもあつたはずだったんだ。それに、今まで過ごしてきた人生も、あつたはずなんだ。

幼い子どもがいたかもしれない。

まだ若い、成人なり立てのような人がいたかもしれない。

中年の人がいたかもしれない。

年老いた人がいたかもしれない。

結婚したばかりの人がいたかもしれない。

子持ちの人がいたかもしれない。

離婚を繰り返した人がいたかもしれない。

男性がいたかもしれない。

女性がいたかもしれない。

ニユーハーフ
どちらでもない人もいたかもしれない。

健康そのものの人がいたかもしれない。
持病を持っていた人がいたかもしれない。

余命いくばくもない人がいたかもしれない。

サラリーマンだった人がいたかもしれない。
学生だった人がいたかもしれない。

フリーターだった人がいたかもしれない。
家も職も無かった人がいたかもしれない。

すべて、『かもしれない』だ。
でも、仮にそうでなかったとしても、その時点で『ありえる』ことだった。これは間違いない。

「僕は……………ぼく、は……………」

ひとごろしだ。

あの時、ただの一片も、罪の意識を感じなかった僕に、その称号はふさわしい。

ざまあみろ、僕。

泣きそうになり、ぐしゃぐしゃになった顔を、冷水で洗い流す。
けれど、洗っても洗っても——心に巣食った闇は洗い流せなかった。

「レイト……………?」

遅いのを気にしたのか、それともただの気まぐれか、ナクアが僕の後ろに立っていた。

彼女に今の話をしたら、どうするだろう?

きっと、抱きしめて、頭を撫でながら、優しい言葉をかけてくれるだろう。

—— だけど、それじゃだめだ。ダメなんだ。

優しい言葉も、抱擁も、今の僕に必要じゃないんだ。
僕に必要なのは、乗り越えるだけの、心の強さだ。

それはただの意地なのか、気まぐれか、何なのか。
それが何なのかはどうでもよかった。

なぜだか知らないけど、そう思っていた。ここが重要だったからだ。

「…………… 大丈夫だよ」

彼女は、そんな僕の表情を見てか、抱きしめてくれる。

この時僕は、彼女は僕が何で悩んでいるのか、分かっていないだろう、と思っていた。

「すぐ慣れるから——」

ぞわり、と身の毛が身の毛がよだつのを、感じた。

「早く割り切ってね。そうじゃないと、レイト死んじゃう」

彼女は、自分の言っている意味が分かっているのだろうか？
本気で、そんなことを、考えているのだろうか。

「あ……………あ……………」

彼女に会ってから初めて、彼女を恐ろしく思ったかもしれない。

G r Tを見せられた時も、これほどの恐ろしさは感じなかった。

「大丈夫、だいじょうぶだよ。相手は洗脳された人、人類の敵。だから倒しても大丈夫だよ」

この言葉を聞いた途端――僕は安堵した。彼女に対する恐ろしさが、消えた。

僕にかけられてる言葉のはずなのに、なぜだか彼女が自分自身に言い聞かせているような、そんな気がしたからだ。

そうだ、自分だけが辛いワケじゃない。

もちろん、これで自分自身の辛さが無くなるわけじゃないけど、同じ痛みを共有する人がいる。

その事実が、どんなに頑丈な盾や鎧よりも、頼もしく思えた。

明るい日と書く明日（後書き）

気が付けばPV500、ユニーク1000突破！
ありがとうございます、本当に。

そうそう、辛いときに「辛いのはお前だけじゃない」って言われる
とスゲー腹立ちますね。

「よそはよそ。うちはうち！」って言ってやりたくありません。

焼け焦げた日常

朝ご飯を食べ終わり、しばらくゆったりとした時間を過ごしていたけれど、ふと疑問がわいたので、ナクアに質問することにした。

「ね、ナクアって、今までどうやって生計立ててたの？」

「うん。古着を売ってるよ。あとは、火事場泥棒」

火事場泥棒——要は、フォーマルティアの軍勢が攻めて来た混乱に乗じた泥棒ってことだろう。

それにしても、基本は古着売りか。
だとするなら。

「僕のサイズに合うのって、無いかな？」

フォーマルティアから落とされてからこっち、下着含め、ずっと同じ服を着ていた。

それは、ここが女の子の家だし、男物なんて無いと思ってたからだ。

「あると思うよ。探してみる？」

彼女は物置から、服が入っているとされる発泡コンテナ——段ボール箱のようなもの、軽量かつ頑丈な積載ツール——を幾つか引っ張り出す。

「これも火事場泥棒だけだね」

戦場になれば、大半のものが破壊されてしまうのだから、これは資源の有効活用と言っべきだろうか？

それとも、倫理に基づき、火事場泥棒はいけない、とたしなめるべきだろうか？

判断しかねた僕は、流して、服を漁り始めた。

けっこう量があるな。

綺麗に折りたたまれているとは言え、男物、女物が入り混じっているため、めばしいものを見つけ出すのは骨が折れそうだ。

「これとか似合うと思うよ」

ナクアの手が止まったかと思うと、白いレースのワンピースを僕に勧めてくれていた……………何で？

「いや、僕、男の子だし」

「似合うと思うよ？」

似合う、似合わない以前の問題だと思う。

「じゃ、これとか、どう？」

次に彼女が取り出したのは、ドレスの一種。

前面にエプロン状の布が付いているため、そのまま料理など、服が汚れるようなことをしても洗いやすい。

「いや、だから」

「似合うと思うよ?」

そう言っ、僕の肩に合わせて、肩幅を確かめてくれる親切さ。

「ほら、サイズもピッタリ」

すみません、うれしくないます。

………と言っ、この流れ、急いでサイズピッタリの男物見つけないと、本当に女装させられる!

目の前の可愛い少女が、冗談じみたことを本気でやる人間だということ、僕は知っている。

「え……と、これと、これでいいかな」

もう適当だった。

とりあえず、見苦しくなかつたらいいや。

合わせて下着と、寝るときに使う分も適当に取っておく。

「……………絶対似合うのに」

フリフリな女の子服を弄りながら、目の前の美少女がつぶやく。

僕から言わせてみれば、絶対僕より、ナクアの方が似合うと思う。そういう類の服は。

焼け焦げた日常（後書き）

お、お気に入り登録件数が減った………なんてこったい。
そんなにも私の小説はつまらなかったのか。

いや、まあ、自覚はしている。

ろくにストーリーラインも練らずに書き始めた作品だし。
最近はやさ重視で特に酷い出来だし。

しかし、そんな作品でも、やっぱり登録件数が減るのは悲しいです
ヨ。

追伸

災害時の火事場泥棒は犯罪です！
絶対やっちゃだめですよ！

神秘に包まれしゴムひも

僕の服選びも終わったので、お互い、これからの予定を立て始めなければいけない。

「ニュースを聞く限り、フォマルティア軍勢の侵攻は無いね」

昨晚奪還された、と言うニュースが大々的に取り上げられている。

だから、今日は戦闘は無し、とのこと。

「と、言うワケで、世界情勢、覚えてないでしょ。教えてあげるね」

午前中はナクア先生の講義（現代社会）になった。

この世界全体で、人類とフォマルティア軍勢の勢力比は40対1程度で人類が圧倒的に優位なのだそうだ。

と、言うのも、つい最近までフォマルティア軍勢なんて無かったらしい。

連中の活動は、ほんのここ数年なのだそうだ。

ちなみに、世間一般では『正体不明の高度技術を持ったテロリスト』と認知されているらしい。

まあ、妥当な伝わり方だ。

しかし、現在は40対1であるものの、人類側は失地回復がほとんどできておらず、徐々に押され始めているのが現状、とのことだ。

それに加え、厄介なのが、その神出鬼没性。

どこを拠点にしているか分かっていない——まさかアーセラーナ・フォマルティア内部だとは夢にも思わないだろうけど——のに、どこからともなく大規模レポートで現れる。

現れたかと思えば街を破壊しだす。しかも、国家を選ばない。

どこの国も頭を痛め、軍事力を外だけでなく、内部にも向けなければならぬ事態に陥っている。

失地を回復しなければならない。

別地点の出現にも警戒しなければならない。

この2点のおかげで、現在戦争中の人類国家は無い。にらみ合うだけで手一杯。戦争する余力なんて無いからだろう。

「こんなところかな。お昼にはまだ早いけど……………」

「どうするの？」

ちなみに、午後から僕はベッドを買いに、ナクアは古着売りの露店を出しに行く予定だ。

「外食しようか」

「うん、それいいね」

決定。

僕らは、適当な準備を整えてから出発した……………。

神秘に包まれしゴムひも（後書き）

そろそろ疲れてきました。

こんな調子で果たして完結まで持つて行けるのか……。

脂ののった空き缶

「情報素子の使い方は、分かるよね？」

家を出てすぐだった。

念のためだろうけど、ナクアが訊ねてくる。

「大丈夫だよ。社会常識は入ってるから」

ナクアの言葉を流しながら、僕は街を眺めていた。

——きれいな街だ。何より生きた街だ。

道路を行きかう表情豊かな人々や、色とりどりの車両、胸を張り、威風堂々と立っている建物の群れ、どれもこれも、壊れてない。皆が生きている。

窓から何度か見たけれど、直で見るのは、僕の記憶の中でこれが初めてだ。

軽く感動を覚えながら、僕はナクアについて行く。

その間に、情報素子内のデータを整理する。

「えっと、データ上だとナクアの露店はあっちだから、駅で別れることになるのかな？」

「そうなるかな。構内で、だけど……っと、着いたよ」

意外と近かった。

見上げれば『デガウクア市駅』とデカデカと書かれた建物があった。

ここが駅——公共のテレポート機集積場、様々な場所へ瞬間移動できる（有料）——か。

記憶を失ってから初めて見た。

「使い方、分かるよね？」

「もちろん」

ナクアから充分量お金ももらっている。
不自由することは無い。

……と、自動券売機に向かって行こうとした矢先だった。

「なー、いいだろお、お嬢ちゃん」

怪しい一団が目に入った。

正確には、怪しい一団と、それに絡まれてる女の子、か。

「いい加減にしてください。それでも忙しいんです」

女の子はまだ幼さを残してるけど、前途はすごく有望そうな容姿だ。

「そんなこと言わずにさ、俺たちと楽しいことしようぜ？」

会話を聞くに、しつこいナンパってところか。

「どうかした？」

「ちょっと、気が向いたから人助けしてくるよ」

ちょうど、足元には誰かが捨てた手ごろな空カートリッジ——缶のようなもの、液体を入れる金属製の容器——が落ちている。

拾い上げて——軽くぶん投げる。

軽快な音ともに、一団のリーダー格と思しき男の頭が傾いた。

「——ああん？」

犯人を見極めようと、一団全員が空カーの飛んできた方角を見つめる。

「ああ、ごめんごめん。ゴミ箱に投げ入れようとしてただけだね」
僕はわざとらしく、いやみったらしく、大げさな身振りで応える。
そして、連中の付近に落下した空カーを拾い上げ、今度こそゴミ箱にシュート。

「次からは気をつけるよ」

これで「気分がそがれた」とか言って帰ってくれるならベストだけど。

そうはならないんだろうなあ。

「てめえ、舐めてんじゃねえぞ。ああ？」

「正義の味方ぶってやんの。うわ、キシヨ」
「うわー、キシヨー」

瞬く間に、美少女と僕を中心に、むさくるしい男の輪が出来上がり、僕に罵声を浴びせてくる。

しかし………語彙が、あまりにも語彙が貧困だよこいつら。
『キシヨ』以外の罵倒の言葉を知らないのかな？
なんか、いろんな意味で残念な人たちだ。

それよりも、さっきからこの美少女、僕のこと見て口パクパクさせてるけど、驚きすぎじゃない？
まるで幽霊見たときの反応だよ。

本物の幽霊見た人って、知り合いにいないけど。

「僕のことをキシヨいなら、離れればいいじゃないか」

「んワケにいくかよ、『オトシマエ』をつけてもらわなきゃなあ？」

脂ののった空き缶（後書き）

ヤバイヤバイ。

ここから随分先のシリアスシーンは思い浮かんでるのに、この近辺の話が全然思い浮かばない。

あと勉強ヤバイ。

いい加減、こんなことやってる場合じゃなくなってきた。
こっちもどうしよう？

ついでに、タイトル変えました。

ヴェールに包まれた棒切れ

あー、やっぱこうなるのか。

典型的頭悪の不良連中だと思ってたけど、ここまでテンプレートとは……。

僕の社会常識の中の『テンプレート・不良』にそっくりだ。

「ケンカ？ やめといたほうがいいと思うよ？」

いや、冗談抜きで。

「てめえ、この人数差で勝てると思ってんのか？ ああ？」

とりあえず、往来でケンカはマズイな……。どうにかしてお帰り願わないと。

「あんま舐めた口きいてつとなあ、ぶつ殺すぞ？ ああ？」

語尾に「ああ？」が付くのは仕様なんだろうか？

そんな僕の疑問などお構いなしに、僕の眼前に半物棒——半物棒。護身用に携帯が許可されている武器、形状は竹刀のようなもの。半物体とは、擬似的に作り出された物質で、任意の出現、消滅が可能でありながら、物理法則に則った物質として扱える不思議マテリアル——を突き付ける。

「こんなもので人は死なないよ」

ちょうどいい。これでお帰り願えるかもしれない。

僕は、まずその半物棒を右手で軽く握る。
続いて、力を入れて握ってみる。
任意の方向に手をひねってみる。

もう後は予想通りだ。

何か怪しげにツイストした半物棒の出来上がりだ。
まあ、再起動すれば元に戻るけどね。

他何人かにも、同じようにやってあげると、男の輪の構成員は借りてきた猫のように大人しくなっていた。

「じゃ、僕行くから」

適当に押しのけ、道を作ると、少女を連れて、むさくるしい輪から脱出。

「逃がすと思ってるの？」

にらめっこに使えば勝利間違いなしの、キモ顔を披露してくれる不良さん。

その手は僕の肩を掴んでいた。

これで威嚇してるつもりなのかな？

遠慮容赦なくぶっ放してくるフォーマルティアの連中と比較するの
もどうかと思うけど、この程度で怯えると思われているのは心外だ。

「さっきの半物棒と同じようになりたい？」

僕がそう言って、丁寧丁寧に、手を取ると、意図が伝わったの

か、飛びずさつてくれた。

他の連中も、自分がそうなるのを恐れてるのか、僕らに手を出そうとはしない

今度こそ、僕らはむさくるしい輪を抜けた。

外ではナクアが待っていた。

「待った？」

「まった。これ、レイトの分の切符」

何だか、心なしか、不機嫌そうだ。

時間をかけ過ぎたせいだろうか？

もっとスマートに事を運ぶべきだったかな。

「ああ、君も災難だったね。じゃ、僕ら行くから」

少女に手を振り、『バイバイ』の合図を送ってから、僕らは駅へと向かった。

ヴェールに包まれた棒切れ（後書き）

とりあえず投稿。

余裕が無くなってまいりました。

懊悩する従妹

シルフィー・ケルセリアスは驚いた。

そして、落ち着こうとした。次に理解しようとした。

『エリオン・デイスデーター』に会った。

まず彼女は、見間違いか、と思った。

しかし、彼女の目は正常だった。

何度も見直して確かめた彼女自身、よくわかっている。

次に、人違いか、と思った。

この確率が一番高い。

連れていた女の子——凄い量の荷物を軽々運ぶ怪り……もとい、力持ちな女の子、すごい美人——は、彼のことを『レイト』と呼んでいた。

それに、彼女が知るエリオンと言う人間は半物棒を軽々ひしゃげさせるような怪力の持ち主ではなかった。

そして、彼女の思考は『人違い』という認識でその仕事を放棄した。

「……………はあ……………」

彼は目の前で、彼女を庇った。

その直後に退避機が作動した。

そして、避難所に辿り着いたのは彼女だけだった。

退避機が作動しなかった時点で、もはや助けようがなかった。

治療が受けられないし、そもそも常識的に考えて、砲弾で腹に大穴を開けていた時点で、即死だ。

楽しい誕生日になるはずだった。

エリオンとゆっくり過ごし、彼の叔父と叔母も到着した時点で、もつと盛り上がるはずだった。

続くはずだったその楽しい時間が、ただの一瞬で碎け散ってしまった。

それは彼女にとって、あまりにも理不尽な、運命の仕打ちだった。

彼女は、しばらくの間、目に映るもの全てを呪った。

肉親との再会を果たせた一家、その幸せを呪った。

ペットが見つからないとわめき回る淑女、その悲壮な声を呪った

友達が殺されたと嘆く学生、その不幸を呪った。

床に寝転がって、寝息を立て始めている者、その怠惰を呪った。

自分を見つけて喜ぶ母親、その視野の狭さを呪った。

連絡だけよこした父親、その淡泊さを呪った。

そして、丸1日置いて、ようやく外面だけは取り繕えるようになった。

買い出しを頼まれて、出て行った矢先、先程の一団と出会った。

彼女は呪った。この場にエリオンがいない、その事実を。

エリオンが居れば、彼女は1人で出かけることもなく、こんな状況にもならなかっただろう。

そして、驚くべき事態が発生した。

エリオンと瓜二つの人物が、彼女を助けたのだ。

しかし、彼ではない、シルフィーはそう認識した。

だから彼女は呪った。神の采配を。

なぜ、このような複雑怪奇な運命に、私を巡り合わせるのか、と。

懊悩する従妹（後書き）

あー、休載したい。

でも定期更新にするって、言っただけだし……。
下手なこと言うもんじゃないですね。引っ込みつかなくなるから。

あ、お気に入り登録してくれた方、どなたか存じませんがありがとうございます！

すばらしい何か

駅構内のレストランで食事を終えると、僕らは各々の道へと向かう。

「じゃ、レイト。またあとでね」

ナクアが手を振って僕にしばしの別れを告げる。
僕もそれに応えて、手を振り返す。

目の前にあるテレポート装置は、外套型と違い、ゲート型と呼ばれる類のものだ。

お互いに座標を合わせた、1対のテレポート装置からなり、まるで門をくぐる感覚でワープができる。

また、駅のテレポート装置は常時起動しているため、向こうの景色までバッチリ見える親切設計だ。

「ようし」

決意を新たに、僕はゲートをくぐった。
きつと、いい家具を見つけてやるぞ。

記憶を失ってから初めての1人歩き。どうなることやら。

……記憶失う前の知り合いとかに会ったらどうしよう？

すでに先程会っていたことにも気づかず、僕は家具屋へと歩を進めた。

……。

.....。
.....。

到着したのは、大手の家具屋。

ここなら、ハズレは無いはずだ。値段も結構安いし。

「.....けっこうあるなあ」

ベッドひとつとっても、すごい数が用意されていた。
これじゃあ、どれを買えばいいのか、分かったもんじゃない。

しばらく右往左往し、同じエリアを徘徊していたら、見かねたのか、店員さんが声をかけてくる。

「何かお困りかな？」

随分フランクな口調で話しかけてくれる女性店員さんだ。
歳は僕と同じくらいかな。

「ベッド探してるんですけど.....どれ買えばいいのか分かんなくって」

「あー。この数じゃ迷うよねえ」

目の前のベッドの群れを眺めながら、店員さんと2人、ため息を吐く。

「ま、嘆いてても仕方ないね。削れるところから削っちゃおう。お客さん身長は？」

「え……………」

そう言えば、覚えてない。

大体、170か、それぐらいだと思っただけ……………。

「よっ！」

悩んでると、店員さんが近づき、背伸びして僕の頭頂部に触れる。

この時、僕らの距離はほぼゼロ。

見る人が見たら抱き合ってたりとか、キスしてたりのように見えることだろう。

「な、何？」

うつたえる僕をよそに、店員さんは自分の手の感触を確かめていた。

「ふむふむ、大体171……と」

何その数字？　もしかして僕の身長？

「平均的なベッドでいいんじゃないかな？　とりあえず、目についたこれとか」

そう言っつて、本当に無作為に選びだしたベッドを僕に勧めてくれる。

「もうちょっと、判断基準とか無いの？」

「えー、あるワケないじゃん、そんなの。ぶっちゃけどれでも一緒だよ」

ぶっちゃけたよこの店員！ 社内教育されてるのか！？

「それにリアりんはバイトで、本来ならもう帰ってるはずなのだよ。タダ働きてやってるだけありがたく思うのだね」

な、なんて自己中心的なバイトだ。
なんでこんなのが採用されたんだ？

「それに、こういうのは直感が重要なのですヨ。『これなら安眠できる』って思えること。これに尽きるね」

たしかに、区別がほとんどつかないとき、重要なのは、理屈より直感だ。

でも、いい加減に決めた物で、後々後悔したくはない。

「難しいなあ……」

「ま、すごくいいのが欲しかったら金を出すんだね」

結局そこに行きつくのか。でも金はない。

「お、これなんていいんじゃない？」

……………直感で行こうか。このままじゃ店員に勝手に決められてしまう。

……………。

.....。

「まいどありー。じゃ、配達しようか？ それとも持って帰る？」

「配達には別途送料がかかるんだっけ？」

「うん。高い買い物したからこれは免除だね。ただ、今日中には到着しないよ」

論外だ。昨日のような事態が2日も続いたら、僕は睡眠不足になってしまう。

「持って帰るよ」

「おっけ、じゃあこれがあのベッドのパーツ一式ね」

そう言つて、渡された箱は、およそ女の子が軽々と持ち運べる重さじゃなかった。

なんとなく、この娘が採用された理由が分かったような気がする。

「あと、組み立てはセルフサービスになるよ？」

「うん、それは大丈夫。何とかするよ」

正確には、『するしかない』んだけどね。

「ふいー、やっと終わったよ。であであ、リアりん、帰りますよー」

帰る宣言をしたこの不良店員と、不本意ながら一緒に店を出る羽

目になりそうだ。

すばらしい何か（後書き）

定期更新にしてからこっち、アクセス数がゴリゴリ減ってます。
どうしたものか。

夕闇に溶ける

「そう言えば君、他の人にも同じように接してるの?」

まあ、不本意と思ったものの、一緒に帰るなら帰るで構わない。
話し相手ができて、手持無沙汰にならなくてむしろいいかも、と
思えばいいし。

「まさかあ、ちゃんとお客は選んでるですヨ」

「それはそれで問題ありだと思うのは、僕だけだろうか?」

「えー、それでリアりん怒られたこと無いですよ」

この人、なかなか自由奔放な人みたいだからなあ。
怒られてても流してそうだ。

「そう言えば、さつきから気になってたけど、『リアりん』って何
?」

「はえ? ああ、そんなことかあ。私の名前が『エリ・アリーネ』だ
から、『リアりん』なのですヨ」

なるほど、真ん中だけを読むワケだ。
いや、問題はそんなことじゃなくって。

「で、君、どこまで着いてくるつもり?」

「わー、いきなり話変わったねー。ま、いいや。少なくとも駅まで

は着いてくよ。その先は知らないけど」

そんなことだろうと思った。

「あのさ、さつきから私のことばかりしゃべってて何だか不公平な気がするなー。」

キミも自分のことについて喋ってくれたまえよ。とりあえず自己紹介から、はい！」

え、アレ？ 何この流れ？

「私はちゃんと名乗ったぞー。ファーストネームだけでいいからちゃんと喋れー」

「わ、分かったよ」

リアの勢いに押されて、自己紹介する羽目になってしまった。

「レイトだよ。レイト」

「『レイト』かあ。呼びやすい名前だね」

まあ少なくとも、略さないと呼びづらくて仕方のない名前よりは、呼びやすいこと間違いなしだ。

「太陽、だいぶ傾いてきたね」

そして、何の脈絡もなく、天気の話へとシフトチェンジした。

「そうだね、この時期は特に、早く日が沈むからね」

「もうすぐに夕方かあ……………ね、レイトは夕方って好き？」

いきなり訊かれても困ってしまう。

好きだろうか……………うん、少なくとも嫌いじゃない。

それに、この空気、好きって答えた方がいいような気がする。

「そうだね、好きかも」

「そう——私は嫌い」

「え……………？」

予想外の返答。僕は戸惑う。

「だってさ、一歩間違えたら闇に沈んでしまいそう、そんな気分にならない？」

そう言って、彼女は、まだ短い自分の影を指さして、言う。

——きっと、夕方に嫌な思い出でもあるんだろうなあ。

そんなことを考えながら、肩を並べて僕は歩く。

「ああ、もう駅かあ、じゃ、縁があったらまた会おうね」

切符を改札に通し、別れる……………はずが。

「……………何でついてくるのさ」

リアと僕は同方向へ向かっていた。

「だって私、家こっちだし」

まあ、いいや。どうせ降りる駅は違っただろう。

——と、思ってた時期が、僕にもありました。

「やー、まさか駅まで一緒とは、私も予想してなかったですヨ」

とは、リアの談である。

「ほんとにね……………」

なんだか疲れた僕は、足取り重く、家へと向かおうとする。

「これならまた会うこともあるかもだねー。うれしい？」

「べ、別に」

正直、同年代の友達の顔なんて誰も覚えてないから、顔見知りが増えるのはすごい嬉しいんだけど。

それに、と、彼女の姿を見してみる。

肌は色白だけれども少々黄色がかっている。有色系の人らしい。サイドテールに結った長い髪は黒、と言うには少し色素が薄く、茶色がかっている。

顔立ちは整っており、ナクア程じゃないけど、美少女と言える容姿だ。

腰も引き締まっていて、スレンダーな体型だけれど、主張すると

ころはしっかり主張している。

また、スカートからのびる脚は………って、何で僕、美少女鑑定なんてやってんだろう？

とにかく、可愛い女の子とお近づきになれてうれしくない男はいないだろう。

「またまたあ。リアりんにはオミトオシですぞー。レイトって、友達少なそうだし」

「……………うぐぬう」

言い返せない。

事実ゼロから始めてるワケだし、記憶が無いから前の僕がどんなだったか思い出せないし。

「仕方ないなあ。リアりんがお友達になってあげよう」

何だか知らないけど、負けた気分。けど、不思議と不快感は少ない。

こうして、僕は友達が1人できたのである……………。

反省会の重要性

「今回の戦闘結果は上々なモノだったようだな」

大隊長が破壊の限りを尽くされた街を眺め、うそぶく。

「ええ、今回、エリート2名の離反もあったようで、おかげで我方の被害はほとんどありません」

「例の新型は………なかなか良好な性能だそうじゃないか。なぜああまで酷評する？」

「はい、エリート相手ではあの程度の性能差、まったく意味がありません。数を揃えやすい分、雑魚の方がマシでしょう」

「強く安く、か。それが兵器の理想だが、な」

現実はそのならないことを、大隊長はよくわかっていた。そして、目の前の部下が言うことが正しいことも理解していた。

「さて、これが、エリートの暴れ回った後かね？」

弓なりに陥没したアスファルト、異質な方向へとひしゃげたビルの列。

ナクアのGⅠ-Tが放たれた跡。

「ヤツらの使う特殊装備の跡でしょう。被害状況から察するに『手甲』ですね」

「こんなものと相対しておるのだな。前線に立つ兵士は」

こんなものをまともに食らえば、機動装甲だろうと戦車だろうとあつという間にバラバラにされることだろう。

だが、味方になれば……………これほど心強い味方は無い。

「たしか、離反したのだったな。この土地に現れたエリート2名と言うのは」

「ええ」

「味方にできないものかな？」

うまくいけば、強力な味方を得るだけでなく、連中の正体を暴く足掛かりとなる。

「映像データも残っておったな。解析させて、個人特定もさせる。きわめて内密にな」

大隊長はこう考えていた。

『連中』は確かに正体不明の拠点を使っているが、さすがに裏切り者に使わせるような拠点は無いはずだ。

だから、探し続ければ、いつか必ず、捜査の網に引っ掛かるはずだ、と。

だが、捜査していることを気取られてはならない。

警戒されてしまえば、接触は困難を極めるだろう。

それを避けるためには、行動を慎重に、密にする必要がある。

「さて、どのような結果になるか……………」

焼け焦げた日常の副産物

その日は結局何事も無く終わった。

僕は、ベッドをセットした後、露店セットを持ったナクアを駅まで迎えに上がり、そして今——シャワーを浴びていた。

今日かいた汗を流し、さっぱりした僕が、脱衣所に戻った時だった。

——悪夢が始まった。

僕は違和感を覚えた。

そこには、僕が今日着てた服と、寝間着として、今日から使うはずだった古着が置いてあるはずだった。

しかし、そこには、いま言った物の何一つとして、置いていなかった。

その代わり、目の前にあるのは、どう見ても女物の——昼間ナクアが僕に勧めたエプロンドレス。

下着が男物なのが、せめてもの救いか……………救いにもならないけど、その隣にある物体の前には。

「ナクア！ ナクア！」

「どうしたの？」

にやけた声の返答。確信犯だ！

「僕に何をさせたいのさ!？」

「女装？」

いや、なぜに疑問形。

「ふふふ、早く服着ないと湯冷めしちゃうよ?」

「ぐ……くう………」

し、仕方あるまい! 背に腹は代えられん。
僕の服はどうせ、国境の向こう側だ。

腹を括り、僕はエプロンドレスに袖を通し……………。

「——って、ふざけてないで僕の服返してよ!」

「元々私のだよ? 盗品だけど」

そうだった! でも、いまそんなことは関係ない。

「そろそろ、本気で怒るよ?」

「怒ったらどうなるの? 裸で出てくるの?」

……………そうでした。

今の僕は、パンツ一丁の素敵スタイルでした。

羞恥心に勝てない僕はここから出られない。

選択肢は2つ。

パンツ一丁の変態さんになるか。
女装した変態さんになるか。

.....。

.....。

.....。

「..... ありゃ、意外と似合ってない」

出てきた僕に対する、ナクアの第一声がそれだった。

「何だかガツカリ。着替えて来て」

そう言っつて、僕の手にも、本来着るはずだった寝間着が渡される。

言うだけ言い、振り回すだけ振り回してくれたこのお嬢さんは、
暖房の入っているリビングへと消えて行った。

残されるのは、エプロンドレスを着込んだ、変態男子1名。

「.....。.....。..... はあああああ!？」

何このオチ!？

焼け焦げた日常の副産物（後書き）

いつの間にか30話を突破していました。

こいつぁビックリだぜ、です。

正直、とうの昔に永久休載してるとばかり、って前にもあとがきで書いてたような気がしますよ。

2章はここまでです。

章タイトルと内容が一致していないような気がしますよ。
それ言うならサブタイもだけど。

予習授業復習試験

君がその手に持つものは何？

君がその手に執りたいものは何？

君がその手でしたいことは何？

君がその手で捨てたものは何？

「1週間前戦つてたところ、もう帰り始めてる人がいるみたいだね」

僕は情報素子で得たニュースの内容をかいつまんで読み上げる。

「そろそろ来るよ」

「え？」

「フオマルティアの侵攻。今日の夕方くらいかな」

それを聞き、僕の背筋に緊張が走る。

「どこに？」

「それが分かれば苦労しないよ。だけど、この国の中……だと思っ」

それはつまり、前回の報復、と言ったところだろうか。

「規模は推測できそう？」

「少なくとも、前回よりは多いと思う。エリートも投入されるはず」

僕はまだ、戦闘経験も浅い。

エリートと相対して、勝てる自信は無い。

「でも大丈夫だよ。今回から2人だから」

……………そうだ。僕にはナクアがいる。ナクアには僕がいる。
勝てる自信は無くとも、負ける心配なんて無い。

「その前に、支給品の内容、一通り確認しておかなきゃね」

午前は支給品の確認、及びその運用思想の講義に充てられることになった。

ただ、人目につかないよう、支給品の起動も室内で行わなければならないのだけだ。

「Gr TとDr Sはいいよね」

「うん」

あれの出し方は、もう充分に分かった。

「じゃ、今度は、スナイパーライフルをイメージしてみて」

言われるまま、僕は想像してみた。

スナイパーライフル——スナイパーライフル……。

「……………うまくいかないや」

前は、「何でもいい」って言われた後、すんなりできたのになあ……。

今回条件まで付いて何でできないかなあ？

「じゃ、見本見せるね」

《呼び出しを確認。デイント D₁ T機能制限状態で起動》

瞬間的に、ナクアの手に握られる対物狙撃銃。

僕がイメージしてたのとは全然違うデザインだ。

僕が想像してたのは、ここまで大型ではなかった。

そもそも、ナクアの話で僕が想像してたのは、対人サイズの代物で、こんな戦車だろうと機動装甲だろうとぶち貫けそうな化け物サイズの銃じゃなかった。

呼び出せなかったのも頷ける。

「出せる？」

「やるだけやってみるよ」

ナクアのD₁ Tが掻き消えたことを確認してから、僕は右手を突出し、イメージする。

——対物狙撃銃、対物狙撃銃、対物狙撃銃……………。

《呼び出しを確認。アクセス D₁ T通常起動》

よかった、大丈夫だ。

組み上がったD₁ Tを眺め、僕は安堵のため息を漏らしてから、

この場から送り返す。

「うん、いい感じだね。じゃあ、次に近接兵装の説明をしたいんだけど……その前に、『機能制限状態』を使えるようになってほしいかも」

「何それ？」

文字から察するに、機能を制限するんだろうけど、何か意味あるのかな？

「効果は読んで字のごとくの、機能制限なんだけど、その前に説明しておきたいのが、支給品の『使用限界』」

……なんとなく話が読めてきた。

そして、そこからはおおむね、僕の予想通りの話が展開され始めた。

まず、支給品には、『使用限界』があり、それを超えての連続使用ができない。

『機能制限状態』では、使用時の負荷が軽減されるため『使用限界』に近づきにくくなる。

使用時にかかった負荷は使用していない間に修復される。

彼女の話をもとめるとこんなところだろうか。

「じゃあ、試しにD・SかD・Tでやってみて」

「……むむむ……」

《呼び出しを確認。D・S機能制限状態で起動》

よし、できた！

間違いない。確かな実感がある。

瞬く間にD・Sが組み上がる。

「……………機能制限って言うけど、具体的に何が制限されてるの？」

率直に言つて、気になった。

G・Tとかなら、威力が下がるんだろうけど、銃器にそんなの関係ないのではなからうか。

「引鉄引いてみて」

「はい？」

引鉄引けとおっしゃいましたか？

いやいや、室内でぶっ放すのはマズイよ？

「いいから」

「う、うん」

促されるまま、僕はためらいつつも引鉄を落とした。

「……………。」

何も起きない。

引きが足りなかったかな？

もう一度引いてみる。
今度はしっかり、深く。

「……………何も起きないね」

彼女が「引鉄引け」と言った理由が分かった。

「うん、今のD・Sは鈍器にしか使えないよ」

機能制限って言うのは、武装本来の機能が完全に消失している状態らしい。

とりあえず単なる棒切れと化しているD・Sを送還する。

「じゃ、次は、近接兵装だね。見本見せるからやってみて。けど、絶対に通常起動しないで」

ナクアがこれまでにないほど、『絶対』を強調している。
何かは分からないけれど、従った方がよさそうだ。

《呼び出しを確認。^{アクセス}R・P・T機能制限状態で起動》

ナクアの手が剣を執った。
切っ先が平らになっている、奇妙な剣だ。

「これが『R・P・T』。通常起動したら刀身が100万にまで達するから、ここでは絶対しないで」

ひゃくまん……………。

そんなもの、近くにあるだけで死んじゃうよ。常識で考えるなら。

そもそも、100万 もあったら、プラスマ化してるだろう、っ
て思っても、フォーマルティアのテクノロジーなら何とかなってしま
うんだろうなあ、いや、事実なってるみたいだけど。

とりあえず、僕もナクアに続いて出してみる。

《呼び出しを確認。^{アクセス} R P T機能制限状態で起動》

僕の右手が切っ先の無い剣を執る。

うまくいったことを確認し、安堵を覚える。

「うん、とりあえずここでひと段落だね。お茶でも飲もつか」

無駄に緊張した数十分間だった……………。

予習授業復習試験（後書き）

3章突入です。

初っ端から説明ばっかです。

でも、説明しないとややこしくなるのです。

説明されてもややこしいと思いますが。

説明要らずのシナリオが書ける人がうらやましいです。

合否を分ける試験後の復習

その後も、ナクア先生による講義は続いた。
要点だけをまとめると以下の通りとなる。

G r Tは右手用左手用が別々で用意されている。

姿を消す^{ルミィ}L m Iという支給品がある。

使用してもらったが、見えなくなるだけじゃなく、情報素子の生体センサーにも反応しなくなっていて驚いた。

敵がR p Tを使ってきたときは、G r Tの力場か、R p Tで受け止めること。さもないと蒸発する。

支給品とは別途に『通常服』と『戦闘用装甲服』があること。
通常服は落ちてきたときに身に着けていたものらしい。

戦闘用装甲服はデザイン同じの機能向上モデル、らしい。
身に着けてみても違いは全く分からなかったが、強度が上がっていて、あちこちに暗器が仕込まれているらしい。

『高出力状態』と呼ばれるモードが各支給品には用意されている。
負荷が増えるが威力が向上。

正直、支給品はもう充分な威力があるから、エリート戦以外に使いどころは無いかも。とはナクアの談。

最後に、興味深い話があった。

エリートには支給品の他に『固有兵装』なる、支給品を大幅に上回る強力な武装が各々に用意されているというのだ。

要するに、明日戦う敵は、今日相対した敵とは違う武装を持つ、

と言っことだ。

しかし、こちらは記憶喪失のおかげでそんなもの出せやしない。
つまるところ、僕は他のエリートより、武装という点でかなり劣
っている、と言っことだ。

——まあ、こんなところだろう。

「じゃあ、お昼からどうするの?」

そして今は昼ご飯を食べ終わったところだ。
ナクアの言う通り、今日の夕方から襲撃があるとするのなら、も
うあまりのんびりはしていられない。

「基本的にはのんびりするよ」

そう言って、床に寝そべってしまっ。
大した脱力っぶりだ……………。

風邪をひくとよくないので——エリートが風邪をひくかどうかは
不明だが——布団をかけてやる。

「レイトもいつしよに寝る?」

いやいやいや……………。

合否を分ける試験後の復習（後書き）

模試の復習はきちんとしよう。

それが、合格への近道だぜ。と先生がいつもおっしゃってます。

戦支度

「大規模な転移を確認しました。『連中』のご来訪です!」

タイミングとしては妥当なところだ……しかし、なぜ? と副隊長は思う。

「どうしてここに来るかなあ?」

この場は先日襲撃があっただけで、様々な条件が合わさり、敵を撃退できたばかりの場所だ。

一部住民も戻り始めている

「すぐに部隊を集結させろ、打って出るにも、守りを固めるにも今の状態では不可能だ」

そんなことは分かってるよ、と内心毒づきながら副隊長は指揮系統の構築を行う。

「レーフェル隊は都市外縁部で待機。連中を外に出すな。自走砲隊も同様だ」

先日の戦闘の疲労はほばないとは言え、機体の方が万全とは言えない。

変わり種が突っ込んできただけでレーフェル隊は壊滅するかもしれない、と副隊長は予測する。

「援軍は?」

「付近のパトロール部隊が応援に駆けつけてくれるそうです。所要時間は10分。部隊編成は機動装甲が12です」

なかなか心強い、と副隊長は思う。

12機、すなわち3個小隊だ。

動けるのがレーフル隊だけの現状と比べれば、単純計算で機動装甲の戦力は4倍にまで跳ね上がる。

「他の援軍は？」

「時間がかかります。本部からは3時間以上はかかります」

前回よりは待たなくていいかもしれないな、とは思っものの、自分たちがいま相対しているこの街には、間違いなく、化け物が潜んでいる。

人の皮を被った、化け物が。

「今回、『彼ら』の応援は無いよねえ」

そう言つて、副隊長は情報素子に記録されていた画像を自分の眼前に表示する。

前回、現れたエリート2人組。敵をなぎ倒すだけなぎ倒し、どこかへと消えて行った、あの2人。

現れないことは前提で進めるとしても、あの中には敵対心旺盛なエリート殿がいらつしやることだろう。

相対した場合、勝てるか？

変わり種すら、赤子の手をひねるように倒して見せたあのエリート、それも3人を、機動装甲で倒せるか？

あくまで表面上は冷静を装いつつも、副隊長は不安で仕方がなかった。

戦支度（後書き）

時間的余裕が無くなってまいりました。
いろんな意味で。

あらがう者たち

市街全域の調査が終了した。

報告内容は、一般が258、エリートが3、変わり種が12。
バカげた量だな、とレーフェル1は思う。

前回はエリートが味方で、一般も、変わり種もその3分の1程度しかいなかった。

その上、エリートの内1体が、自分の方に向け接近中にもかかわらず、CPからの指示が無い。

勝てるワケがない。

自分で自分の敗北を思い描く。

勝利から遠ざかる方法のひとつだ、と自嘲する。

しかし、どれだけ勝利から遠かろうが、自分は負けるワケにはいかない。

勝ち戦にならなくとも、生き延びている間は負けじゃない。レーフェル1はそう思っていた。

自分が生き続ける限り、決着はつかない。だから勝ちでないことは負けではないのだ。

《こちら、第22機甲パトロール部隊。これより、貴部隊の指揮下に入る》

どうやら心もとなない援軍がCPの方に到着したらしい、とレーフェル1は思う。

エリートが1人いれば、その程度の部隊、それこそあつという間に食われてしまうだろう。

そもそも、こちらに到着するより早くにエリートが来るだろう。完璧に無駄な援軍だ、と思う。

——そして、そのエリートが目の前に出現した。

「噂をすれば何とやら、つてか！」

噂をしていたのは彼の心の中だけだが。

とにかく、このまま座して死を待つつもりはない。それがレーフェル隊全員の共通見解だった。

「レーフェル1よりCP、敵と遭遇した。独自判断で攻撃に移る」

返答は期待していなかったので、言うだけ言うと言線を切った。

レーフェル隊の全機が脚部ホバーを起動させた。路面に積もっていた砂埃が巻き上げられ、小規模な砂嵐が発生する。

そして、間髪入れずに蛇行前進。機動装甲が用いる回避突撃だ。

回避突撃を開始するまでの間に、レーフェル1はいくつかのことを並行して行っていた。

戦場では1つのことしかできないような不器用な奴から死んでいく。レーフェル1はそう考えていた。

まず、敵の確認。

これは容易に行えた。

機動装甲のカメラは、仮面でなく、明らかに素顔を晒している人間を捉えていた。

表情までは分らないが、エリートであるという、CPのレーダー情報は確かだった。

次に、敵の目標。

これは分からなかった。

エリートは、自分たちのことに興味も持っていなかったらしい。回避突撃を開始してようやく気づいた、と言ったところだ。

最後に、周囲の敵の確認。

これは皆無だった。

残りのエリートも、変わり種も、遙か遠方だ。増援を憂う必要はない。

回避突撃を行いながらも、レーフェル1は不審に思う。敵にやる気が感じられないのだ。

——こちらを舐めてるのか？ 何か裏でもあるのか？

だが、照準器の中に敵がいる。

獲物を前に指をくわえていいのは、残弾が無いヤツか、四流以下の兵だけだ。

レーフェル1が引鉄を落とす。

機動装甲が持つ37ミリ機関砲から砲弾がマズルフラッシュの梱包を解かれ、次々と飛び出してゆく。

飛び出した砲弾はエリートへ向け一直線に迫ってゆく。

「お、公務員の方が。はりきってるねー」

着弾を確認。しかし、命中弾はなかった。

なぜ、とレーフェル1は思う。

その回答はすぐ目の前にあった。

回避突撃をしていた機動装甲、その胸部装甲の上部、コクピットハッチの上にエリートが立っていたのだ。

なぜ、とレーフェル1は思う。

接近する軌道を取っていたとはいえ、まだまだエリートは遙か遠方だった。

瞬間的に距離を詰めるにしても慣性の法則がある。超スピードだったなら、何の衝撃もなくコクピット上部に取りつくなど不可能だ。

ならばテレポートか？

これも望み薄だ。回避突撃を敢行する機動装甲、そのコクピット上部に受信機など無い。

受信機無し、しかもピンポイントで座標設定ができるテレポート装置と言うのは、レーフェル1が知る限り、建物サイズにもなる大型のものしかない。

別系統の技術は？

瞬間的に対象を移動させるテレポート以外の技術を、レーフェル1は知らなかった。

現行技術でそんなものを聞いたことはなかった。

正体不明の技術。何だか目の前にいる人の皮を被った化け物にはおあつらえ向きの装備だな、とレーフェル1は思う。

レーフェル1は判断する。

現状技術の延長線上にしろ、別系統の技術にしろ、この敵が持つ技術は、自分たちの国の技術を軽く超えている。

「でも悲しいかな。ちよいとばかり、スペックが低かったみたいだ」

レーフェル1は頭部カメラ正面の物体に目を戻す。
ほぼエリートの姿で埋め尽くされている。

——男の大写しなんか、見たく無いもんだな。

なかなかの美男だった。

歳は20代前半と言ったところだろうか。

若いな、とレーフェル1は思う。

そして、自分はこの若造に殺されるのだろう、とも思った。

「来世からやりなおしなあ！」

エリートが拳を振りかぶる。

次の瞬間、その手が鋼色に包まれた。

さらにその次の瞬間——レーフェル1の隣のビルが轟音と共に崩れた。

あらがう者たち（後書き）

完結にはまだまだ遠いです……。
しんどいです。

流れるもの

初弾が射出された直後、僕は工作機械のように右腕だけを前後させて、次弾を装填する。

ナクアの話によれば、弾速は毎秒およそ3000、距離は8000だから弾着まで3秒とない。

照準器スコープの中で、エリートのいた向こう側のビルが崩れるのが見えた。

「初弾、外れた。誤差42センチ、8時方向に修正」

言われたとおりに偏差を加えてから、すぐに引鉄を落とす。
一瞬で次弾が送り込まれる。

ほぼ無風とは言え、距離8000での精密射撃なんて、普通の間なら正気の沙汰じゃないけれど、あいにくと今の僕らは普通の間じゃない。エリートだ。

さて、今度はどうだ？

照準器を覗き込む右目に意識を集中させる。

エリートがこちらに向き、何かを喋りながら、G R I Tで重徹甲弾を叩き落とすのが見えた。

けれど、それらの音全ては僕のもとには届かない。無声映画でも見ている気分になる。

「命中。だけど防がれた」

さすがに気づいたか。僕らがどこにいるかまでは、まだ分かってないだろうけど。

「第2射点に移動しよう」

同じところで砲撃を続けることの愚かさ、何世紀も前の人類がすでに学んでいる。

僕がD・Tの展開を解き、移動を開始した頃、今更のように先程外れた初弾の弾着音が聞こえた。



やられる、と思った。

死を覚悟した。

けれど、自分は死ななかった。

何者かの狙撃によって、自分は驚異的な性能を誇る敵を前にして、いまだに生きながらえていた。

「CP。今の、誰が撃った？」

切断していた回線を再び開き、CPへ回答を請う。

《不明だ》

レーフェル1は、今、冷静さを欠いていた。
だから、まずは落ち着こう、と思った。

目の前のエリートが、自分に興味を失ったように、スクリーンが

らかき消えた。

恐らく、さっきのスナイパーとやり合うつもりなのだろう。

「レーフェル1よりCP、エリートに逃げられた。指示を」

そう、エリート以外が敵ではない。

冷静な判断ができないと判断した自分はCPに指示を仰いだ。



「来てるな……………」

第2射点に移った僕らは、第1射点へジャンプしながら向かう敵の姿を認めた。

D・Tを展開。敵の通る位置を推測する。

現在の距離はおよそ6800、風はほぼ無しとはいえ、動体目標に命中弾を出すのは至難の業だ。

だが、照準器の中には敵がいる。ためらう理由は無かった。

僕は引鉄を落とす。

猛烈な速度で射出される重徹甲弾を照準器に張り付いた右目で見送ってから、僕は左目でナクアの動きを追った。

彼女は今、別の射点に陣取っている。

展開しているのはD・Tでなく、D・Sだ。

おそらく、僕の狙撃が失敗した場合に、ぶっ放すつもりなのだろう。

それは多分、僕への信頼が薄いことを意味しない。

エリートはこの程度では倒せないという、戦闘経験からの確信だ。

だが、ナクアはあえてこの戦^{狙撃}法をとった。それはなぜなのか……

思い当たる節はあった。

初弾に対して、エリートは何の抵抗の素振りも見せなかった。

つまり、不意打ちならエリートは対応できない、ということだ。

それは、初弾を命中させさえすれば、エリートを一撃で仕留めることも可能、と言うことなのだろう。

そして、初弾は外れた。だからこのような戦法をとっているのだらう。

照準器の中に、重徹甲弾が叩き落とされる場面が映し出された。やっぱり通用しない。

照準が合ってても、これじゃ有効弾を送り込めない。

距離が6500を切った時点で、エリートが方向転換した。

僕は速攻で次弾を送る。

ダメージを与えるつもりはない。装備の使用限界に少しでも近づけることで、後の戦いを有利に進めるためだ。

命中確認もせず、装填、次、また次と、あるだけの重徹甲弾をヤツに叩き込む。

マガジンの容量は7発。すぐ撃ち尽くしてしまう。

マガジンを取り換えた時点で、ナクアの持つD・Sがその牙を

むいた。

2方向からの攻撃。防ぐには左手のGr Tを起動するしかない。そして、戦局は僕らの思惑通りに進んだ。

ヤツは左手のGr Tも起動して、それを防いだ。

そこで、向こうが反撃に転じた。

右手にDr S、左手にDr Tを展開。

それぞれ、自分の同類へと、その牙を向ける。

――放たれた。

それを確認したとき、反射的に僕は頭を伏せた。しかし、彼の狙いはそんなところには無かった。

弾丸は僕には命中しない。

だが、着弾の衝撃に建物の方が耐えきれなかった。

気づけばビルが崩れ始めている。

重徹甲弾が撃ち込まれたのは僕ではなく、僕のいたビルの方だった、と言っワケだ。

「将を射んとするなら……………だっけ」

崩れるビルの屋上から、僕は飛び降りた。

不本意なゲームだが、手玉を放ってしまった以上、仕方がない。さあ、前座はこれまでだ。

ここからだ。今からが本番だ……。

流れるもの（後書き）

今回から再び戦闘です。

前回のは『描写が簡単すぎ』と言われたので、今回は多少頑張りま
すよ。

ただし、過度な期待は困ります。

差し伸べる手、握る拳

飛び降りたはいいものの、向こうからの攻撃は激しかった。

僕がいたビルは、周りと比べてひととき高かったので、周りのビルに隠れるまで若干のタイムラグがあったのだ。

D n SとD n Tが遠慮容赦なく僕の方へと放たれる。

忌々しいことに、立射のくせに精度が高い。

《呼び出しを確認。^{アクセス} G r T通常起動》

僕はG r Tを展開。

叩き落とすことは考えず、軌道をそらし、後ろに受け流す。

消耗は少しでも軽減しなければならぬからだ。

数秒と待たず、僕の姿はビルが隠してくれた。

安堵と共に、路地裏に着地する。

G r Tの展開を解いてから、情報素子でナクアに連絡を取る。

「ナクア、そっちは？」

《ミュータントの群が来てるみたい。私1人で大丈夫だけど、時間がかかりそう。それまで援護できないけど頑張っ》

ナクアの位置は、情報素子で常に把握できるが、その場所に向かうわけにはいかなかった。

さっきのエリートは今までの行動からして、確実に僕の方を狙ってくるだろう。

ナクアと合流することは、すなわち彼女に「ミュータントとエリート、両方相手しろ」と言うようなものだ。

男として、そんな情けない事態は招きたくなかった。

「やって——やってやるさ」

固有兵装が無いとかは、関係が無い。

そう、倒せなくてもいい。

ナクアが来るまで、持ちこたえる。それだけでいい。

2対1となれば、向こうに勝ち目は無くなるだろう。それすなわち、僕らの勝利だ。

勝利条件が明確になったところで、僕は大通りへと飛び出した。コンクリートジャングルに阻まれ、敵がどこにいるかは分からない。

僕は、情報素子の生体センサーを起動させた。

反応は一直線にこちらへと向かっている。

お互い、どこにいるのか、お見通しらしい。

僕は場所を変える。

この場所では、狙撃等に対応しづらい。

僕が選んだ場所は、先日ナクアがG「T」を放った場所だ。

ここなら周囲のビルが湾曲しているため、建物の中はもちろん、屋上も使えない。

奇襲をかけられるとすれば路地裏からのみだ。

それから待つこと30秒。

モニターから生体反応が消えた。

L m Iを使ったのだろう。

だが、それにも弱点があることは聞いていた。

——他の支給品が隠せない。

つまり、L m Iの迷彩は支給品を使わない限りにおいて、有効なのだ。

それを知ってか知らずか、ヤツはD n Tの銃口を路地裏より、覗かせている。

戦闘が、開始された——。

轟音が届くよりも早く、僕が今さっき乱射していたものと同型の重徹甲弾が飛んでくる。

音速を超えるD n Tの重徹甲弾は、それ自体の威力はもちろんだが、それに伴う衝撃波もまた脅威だ。

僕はスウエーして躲したものの、装甲服の袖には切れ込みが入っていた。

「く——！」

《呼び出しを確認。D n T通常起動》

僕もDn Tを展開。

立射だが、この距離で外す事は無い。

重徹甲弾は我らが怨敵を闇の世界から引きずり出してくれることだろう。

そう確信し、僕は引鉄を落とした。

鋭い反動が銃床から肩に伝わり、強烈な硝煙の臭いが鼻を突いた。コンクリート製の壁をぶち抜かれ、重厚な悲鳴を上げながら建物が倒壊する。

だが、Dn Tは明後日の方向を向いたまま、展開し続けている。

——— ということだろう？

そう思った瞬間だった。

「やーい、引つかかってやんの！」

——— 背後から人の声！

《呼び出しを確認。Gr T通常起動》

僕は振り向きざまに、相手の顔も確認せず、Gr Tを放った。ナクアから教えられていたことのひとつだ。

—— 戦場では自分たち2人以外は敵だから、何かに気づいたらまずぶちかませ——と。

敵の方は自分の奇襲が成功したと、思い込んでいるのだろう。にやけきった顔のまま、吹っ飛んで行った。

この間に僕は判断する。

今さっき、Gr Tはミュータントがバラバラにできるくらいの出力で放った。

なのに人型を保ったまま飛んで行った。

すなわち、こいつはエリートだ。

そして、奇襲の際、わざわざ声を上げて奇襲の事実と位置を知らせてくれた

すなわち、こいつはアホだ。

実戦慣れしてるしてないはともかく、自分と同等、またはそれ以上の相手に対する戦術を持っていないのだろう。

まあ、さっきのような単純ミスはもうしないだろうけど。

落着いてから、やっと自分の奇襲が失敗したと、気づいたらしい。

けど――遅い。

《呼び出しを確認。Dn S通常起動》

僕は落下点に向け、Dn Sの引鉄を落とす。

Dn Sの電磁加速器の音は、火薬式のDn Tと比べ、はるかに穏やかなものだ。

ローレンツ力で射出された砲弾は、霧雨のように静かに、目標との距離を詰め、命中する。

KABBOOMKABBOOMKABBOOM
爆発、爆発、爆発。

霧雨と違うのは、着弾時に爆発することと、砲弾が音速を超えるため、発射時に音がしようとしまいと関係の無いことか。

爆煙で敵の姿が見えないため、僕は情報素子の生体センサーに目を落とす。

先ほどから、同一地点にとどまったまま動かない点が2つ。片方が僕だ。

そして、次の瞬間、もう片方の点が掻き消えた……………。

差し伸べる手、握る拳（後書き）

謎のバグで1回データ消えました。

同じような文章に書きなおしたものの、出来が酷い。泣きそう。

消える／消えない／消える

Lm Iを展開したんだろう。

こちらもLm Iを展開する。

《呼び出し^{アクセス}を確認。Lm I通常起動》

時間差からして、使用限界の到達は向こうの方が早い。

互いに互いを認識できないこの状態、どこでLm Iを解こうが、リスクが付きまとう。

さて、どう出る？

視覚情報は役に立たない。

味覚や触角はそもそも接触しないと始まらないから、役に立つのは聴覚、嗅覚か。

嗅覚はあてにできないけど。

僕は耳を澄ませる。

まったくだしぬけに記憶の断片が戻ってきた。

100キロ先の小さな音まで聞き分ける設定を持った、3分間しか活動できないヒーローの番組だ。

ん？ ちょっと待て。

……… 100キロ先の音が届くのは、大体5分後。
3分間しか動けないヒーローには宝の持ち腐れじゃないか。

耳を澄ませつつ、関係ないことを考えながら、忍び足で移動する。

Lm Iの使用限界はおよそ2分だ。

さつきも使っていたのだろうから、すぐに切れるはず。

《L m I 使用限界到達。強制武装解除》

結局相手の気配を感じ取ることもできないまま、路地裏で、L m Iは解けた。
情報素子の中で、生体反応は消えたまま。

《レイト、こっちは片付いたからそっちに向かうね》

なぜ反応が消えたまま？

いくらエリートが俊足とはいえ、2分以内に移動できる場所と言え、限られている。

何か、何かが間違っているのか？

ナクアからの通信に返事をする気も起きないほどに、僕は焦っていた。

支給品でないとするなら――。

《呼び出し^{アクセス}を確認。G r T 通常起動》

――確信した。

僕は背後のなにもないはずの空間にG r Tを叩き込む。

……だが、すこしだけ、おそかった。

僕が目標を捕えるより先に、鋼の拳が僕の腹にねじ込まれていた。身体が凄まじい勢いで跳ね上げられたところまでは理解できた。

そこから先は、完全に意識の外の出来事となった……。

消える／消えない／消える（後書き）

昨日のデータ損失にめげつつもがんばりますよ。

ふ……データが消えただけじゃないか。

執筆中小説がすべて消えようとも、俺はやるぜ。
的なやる気を出してる暇はないです。

そのうち更新できない日が出るかもです。

観測者

「消えたり現れたり吹っ飛んだり、迷惑だねえ、今回のエリートは」
さつきから、生体センサーは、おかしな値を示し過ぎていた。
エリートに近寄る変わり種が全滅するし、エリート2人が近づいたり離れたたり、消えたり現れたり吹っ飛んだり。

「計器の故障でしょうか？」

通信士は肩をすくめながら応える。

まるで、ワケわかんないから上官に丸投げさせてもらっよ。とでも言いたげだ。

「さてね。故障してないと仮定するなら、エリート1人が減ったのは大きいだろう」

画面外へと、猛烈な速度で吹っ飛んで行ったエリート。

故障でないと仮定するなら、それだけの衝撃を受けても生存が可能、ということだ。

万が一、落着いてなお戦闘力を残しているのであれば、また市民に多大な被害が出る。

吹っ飛んだのが善良なエリートであるなら、この限りでないが。

そこまで考えた時点で、副隊長は自分の考えを笑う。
敵に善い悪いとラベルを張り付けるとは。

そう、ヤツらは本来敵だ。敵が内部で潰し合っているだけに過ぎないのだ……………。

破壊者

ナクアは対峙した。

レイトを吹き飛ばした相手に。

「レイトをどうしたの？」

知っているが、一応訊ねてやる。

さあ答える。答えた瞬間からお前の死への転落劇が始まる。

「俺が《呼び出し^{アクセス}を確認。G r T高出力状態で起動》

回答の全容を聞き取る必要も、義理もない。

衝撃力場を叩きつける。

遠慮容赦なし、全力のG r T高出力起動だ。

予想通り、放物線と言わず一直線に吹っ飛ぶ敵。

ビルを打ち貫き、打ち貫き、破壊し、家屋を倒壊させ、粉碎し、それでもなお勢いは衰えない。

だが私は知っている。この程度でエリートは死んだりしない。

《呼び出し^{アクセス}を確認。D n S高出力状態で起動》

私はまず自分に衝撃力場をぶつけ、一気に加速、先ほどエリートが通った経路で追いつがる。

いかにエリートと言えど、自分の認識できる領域にとらえなければ、攻撃は不可能だからだ。

そして今、とらえた。

無数の建物、その名残である瓦礫の山を豪奢な敷物にしていたエリートは、彼女の眼前で、砂埃を払いながら今、立ち上がろうとしていた。

のんきなことだ、とナクアは思う。

人類を相手にし続けたエリートによくある傾向だ。

自分が一番強いと勘違いし、無意識に動きに無駄を取り入れてしまふ。

——何でこんなのに、レイトが負けなきゃいけないの!?

恐らく、固有武装を使ったのだろう。

なるほど固有武装を持たないレイトにしてみれば、脅威以外の何者でもない。

だが、発動しなければ、どんなに強力でも、武装はただの装飾でしかない。

そのことを教え忘れていた。

エリートには、一気に畳み掛け、攻撃の隙も与えず、倒すのがセオリーだ。と。

すなわち、レイトが負けたのは自分のせいだ。

レイトを探して、謝らなければならない。

そのためには早く、早く目の前の敵を倒さなければならない。

ナクアは自分の腕に力場をかけた。

Dn Sの長い銃身の先端、銃口がエリートの顎を殴りつけた。

ナクアが持つ運動エネルギーは凄まじく、倒れ込み、もつれあいながらも勢いは殺されぬまま2人は滑り続ける。

下にされたエリートの背中側、装甲服と地面が摩擦で火花を上げているのが、ナクアの目に映った。

だが、エリートは腐ってもエリートだ。

ナクアの目に、エリートがG・Iを展開するのが見えた。

力場で吹き飛ばすなり、捻り潰すなり、痛打を与えることをあきらめていないのだろう。

しかし、ナクアは思う。

——すでに勝負はついている。と。

D・Sの銃口は、エリートの頭部を正確にとらえている。

ゼロ距離。外すはずがない。

こんな形での機関砲の使用は、どんな軍事教本にも書いていないことだろう。

だが、銃口の前に敵がいるとき、引鉄を引くのに躊躇はしない。それが、ナクアと言う人間だった。

高出力状態のD・Sから放たれた砲弾は、エリートの強靱な皮膚を突き破り、頭蓋を破壊し、爆発した。

脳漿が飛び散り、濃厚な死の臭いが立ち込める。

脳と血の入り混じった赤線を路面に残しつつ、しばらくして、2人は止まった。

——レイト、レイトを迎えに行かないと。

正面の死体に目もくれず、彼女はおぼつかない足取りで立ち上がり、歩きだした。

自分のたった1人のパートナーを探すために……………。

あたたかき者たち

……………声が聞こえる。

僕を呼んでいるのか？

分からない。

分かるのは、誰かがすぐ近くにいたことだけ。

ひどく懐かしい声が、おれの鼓膜を震わせる。

誰だっただろう？

分からなかったので、おれは目を開けて、声の主を確かめた。

サラサラな髪の毛の、可愛い女の子が、おれの顔を覗き込んでいた。

このひとだ。この人が、声の主だろう。

そして、この人を己れは知っている。知っているぞ。

「ああ、シルフィーじゃないか……………」

そう言ったつもりだったが、声がうまく出なかった。

肺の中に水がたまっているらしい。

あんまりよろしくない。

己れが横を向いて、水を吐き出すと彼女は驚いた表情で、己れの名前を呼んでいた。

大丈夫だって、逃げやしないよ。逃げたくても、逃げられないしな……………。

ここで一旦、己れの意識は途絶えた。



シルフィーは驚いていた。

まず、波打ち際に人が倒れていた。

それだけでも充分に驚くべきことなのに、その人はあろうことが、エリオンにそっくりだったのだ。

多分、エリオンではない、とシルフィーは思っていた。
前に会った……………『レイト』とか言う人だろう。

とりあえず、仰向けにして、気道を確保した。

息はしてるみたいなので、人工呼吸は必要なさそうだと判断する。

「大丈夫ですか？」

テンプレート呼びかけを行う。

これだけやったのに起きないのだから、反応は期待していなかった。

が、彼は反応した。

固く閉じられた瞼がゆっくりと開き、シルフィーの顔に焦点を合わせる。

「あ…………しる、ふい…………ない……………」

一瞬何を言っているか、分からなかった。

次の瞬間、彼はせき込み、肺にたまった水を吐き出し始めた。

この時、私は理解した。

彼は確かに『シルフィー』と呼ばうとしたのだ、と。

「エリオン……さん？」

うれしかった。

彼は生きていたのだ。どんな形であれ、生きていてくれたのだ。せきが止まったかと思うと、彼はまた意識を失ったらしい。規則正しい寝息を立て始めた。

「……………ふう」

シルフィーは優しいため息をつく。

昔から寝坊助さんだったなあ。と思い出しつつ。

「はりや、誰が倒れてるのかと思いきや」

私は突然の後ろからの声に、振り返る。

「レイト君だったとはね……………」

ああ、また『レイト』だ。とシルフィーは思う。

エリオンにそっくりな少年。

私を助けてくれたことのある人。

だけど、誰でも見間違えるだろう。

こんなにそっくりなのだから。

むしろ、本当に『レイト』なのだろうか？

『エリオン』がワケあつて『レイト』と名乗っているだけではないのか？ とシルフィーは思ってしまう。

『エリオン』レイト』

その予想が当たっていることを知らせてくれる人物は、今ここにいない。

「ああ、レイトの知り合い？」

「え、あ、まあ……………」

違う、と言おうとしても、できなかった。

すでに彼女の頭の中では『エリオン』レイト』という図式が成り立ってしまった。

それに、『レイト』に助けられたことも事実なのだ。

知り合い、というレベルでなくても、私は知っている。

そんな私の心情に構うことなく、目の前の女の子は彼の身体をぺたぺた触り、何かを調べ始めた。

「んー……。強烈な打撲——つと、病院まで運んだほうがよさそうだねー」

それだけ言つと彼女は目の前の少年を負ぶつて、走り出そうとする。

「あの、救急車は……………？」

「ああ、大丈夫、だいじょーぶ。こっちの方が早いから。ひとつ走

りしてきますヨ」

それだけ言うと、本当に走り出してしまつ。
人1人背中に載せてるのに、随分速い。

「あ……………」

気づいた時にはもう姿は見えなくなっていた。

「エリオンさん……………」

何とはなしに、彼女は呟く。

自分の、手間のかかる従兄の名前を……………。

報告書の書き方

「えー、結果として、何をするでもなく、エリートと変わり種は全滅。残った一般も現在掃討中です」

どう報告したモノか、と悩みつつも我らが参謀殿は起こったことを述べてゆく。

《つまり、応援は必要ないと?》

「そうは言っておりません。伏兵がいる可能性もまだまだ否定できませんからね」

今回の荒唐無稽なレーダー表示。
正直信頼に値するとは思えない。

「あと、生体レーダーの新品を用意していただきたいのですが……」

《レーダーのかね? まあ、構わんが》

「お願いします。今回、アホみたいな表示が飛び交ったもので」

アホみたい、と評したが、本当にアホみたいな表示であったのだから仕方がない。

表示が消えたり現れたり、現れたかと思えば、強烈な速度で画面外まで吹っ飛んだり。

正直、やってられなかった。とは、作戦終了後の通信士の談だ。

《では、用意させよう。報告は以上かね？》

「ええ」

《そうか。では、掃討戦の健闘、と言うのも変かな？ とにかく、頑張ってくれたまえ》

「はっ！」

通信が切られた。

即席の司令部に静寂が戻る。

「今回も助けられた。ということかな？」

「そうだな」

「お礼状でも書くかい？」

「却下だ」

その発言からは、自分たちの国は自分たちで守る、と言う、彼の強い意志の表れであった。

だが、副隊長は思う。

この人は、勇気と無謀をはき違えている。と。

しかしその理想、馬鹿げてると思いつつも、嫌いになれない自分
がいることを、副隊長は認めていた。

報告書の書き方（後書き）

さてさて、一応ここで3章終了です。

人間関係がめんどくさくなつてまいりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8793x/>

世界のだれかが紡いだもの

2011年11月29日17時51分発行